
地獄生徒ぜっとな

渡った先は向こう岸・・・

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地獄生徒ぜつとん

【Nコード】

N4911K

【作者名】

渡った先は向こう岸・・・

【あらすじ】

この世には、目には見えない闇の住人がいる。

やつらは時として牙を剥き、君たちを襲ってくる。

彼は…そんな奴らから君たちを守る為地獄の底からやって来た…正義の使者・・・なのかもしれない・・・

あ、ごめんなさい。絶鬼が正義の味方するのが思いつかないんで、
天邪鬼な方向で。

一日目 S H R 『御待たせしました凄い奴?!』 (前書き)

この作品は作者の気分転換に書いた物なので、気分転換にお読みください。

それがこの作品を楽しむ一番のコツだと信じています

一日目 S H R 『御待たせしました凄い奴?!』

水を掻き分けながら足を動かし続ける。

ただ前に、ただ前に一秒でも早く前に出る。掻き分ける水が跳ね上がる音を聞きながら、自分の鼓動の早さも聞く。

そして目的に手を付ける。

「凄いじゃない大河内さん。自己ベスト更新よ!」

「ほ、本当ですか?」

顧問に見せられたストップウォッチには自己ベストより二秒も早い数字が点滅していた。

「やった!」

柄にもなくガッツポーズを取ると水が大きく跳ねた。

数ヶ月も伸び悩んでいたタイムが今、伸びた。これまでの数ヶ月間の苦勞が功を成したのは純粹に嬉しかった。

「これから頑張るなさい、貴女ならまだまだ伸びるわ！」

「~~~~」

「お、ご機嫌だねアキラ」

「自己ベスト更新したからね」

「え、ホンマ。どのくらい？」

「二秒」

自分のことのように喜んでくれる友達に囲まれながら私達は寮に帰っている。

部活こそ違っけど、だいたいの終了時間はどこも大差ないため少し待つか待たせてしまえば一緒に返ることは出来る。

「二秒ってそんなに凄いの？」

「二秒ならだいたい一メートル差が出来るね」

「凄っ!!」

一秒。陸上でさえ0・0数秒からスローカメラを使うのだから、二秒という壁が如何に凄いのかわかる。

「なら今日はパーティーだね。アキラがまた一歩進んだ祝賀パーティーー」

「そんな、大袈裟だよ」

「お、いいねえ」なら暇なみんなも——」

本当に、自分は良い友達を持った。ここまでしてくれる友達は中々にいないし、自分みたいな可愛くもない中学生に付き合ってくれている・・・本当に私は運が良い。

「ならさ——」

「それなら――」

和気藹々と私の為のパーティーを話し合う三人の後ろを歩いていた私は見てしまった。視界の端、話に集中していれば気付かなかったその差異に。

（地縛霊・・・違う、浮遊霊だ）

暗い帰り道、街灯が立ち並ぶ裏の林に彼はいた。泥だらけの服装、生気を感じさせない雰囲気、なにより人間ではまともに立てないような中空。

（ダメ。目を合わせたら・・・付いてくる）

前を歩く亜子達の話に集中するために少しだけ、距離をつめる。不自然な動きかもしれないけど、大丈夫。

「・・・」

そう、大丈夫。

夢を見た。懐かしい、昔の夢。

私は、当時の私達を空中で見るように浮いていて、ただ恥ずかしさや懐かしさに悶えていた。

『いや！一緒にまほらに行こう！』

当時の私は・・・自分で言うのもあれだけど、何て言うか年齢相応だった気がします。

兄妹である彼を自分の見栄で弟と言い、何かあることに彼を連れ回した。今思うと・・・恥ずかしいな。

『アキラ、彼だって本当は——』

『せいせい——』

『何か？』

『い、いえ！なんでもないよ母さん！』

母さんの微笑みに怯えた彼は顔を青くしながら声を張る。

『これはね、君の為でもあるんだアキラ。――が彼方に行き、修行すること君に及ぶ害を少なくする・・・数年だけ我慢してくれ』

彼を父さんの後ろで説教する母さんの姿は私からは見えない。当時の私は父さんの優しい笑みに納得しながら小さく頷いているが裏でなにがあるのか知ったら・・・考えたくもない。

『――、私のこと忘れないでね』

『ただか数年で忘れるわけじゃないじゃないか』

『絶対、絶対まほらに来てよ』

『出来たらね』

『ぐず・・・やくぞぐだよ』

『な、泣くことないだろ！』

泣き出した私にこれだから人間は、と意味がわからない言葉を言いながら彼は私をあやしている。我ながら・・・恥ずかしいな姿だなあ。

『…………』

『男が女を泣かせる……』

『ひっ』

私達の姿が微笑ましいのか、母さん達は微笑みながら見つめている。親戚に覚えてもいない恥を言われるのもヤダけど、自分で自分の恥ずかしい光景を見るのも嫌だなあ。

『約束するし、また会ったらなんでも言うこと聞くから泣くなよ！』

『ぐじ……ほんとう？』

『約束する』

涙と鼻水でグシャグシャの自分を見ながらこの後のことを思い出す。初めてとはいえ、自分も中々に純粹で可愛い所があると思う。

『ほら……』

『なにこれ？』

『これから僕がいない間はそれが護るから、大切にするんだよ』

渡されたのは真青の小さな巾着。

手作り感のある巾着の中には綺麗な紫色の石が入っていて、宝石みたいだ。

『ありがとう・・・』

『それがダメになるまでには戻るから、おとなしくしてるだよ』

『うん！』

初めて貰ったプレゼントは御守りだった。飾り気も、可愛げもないそれは当時から私の宝物。現に私は御守りに何度も助けられ、いつでも彼を感じていられた。

『じゃあ、行って来るね』

『行ってらっしゃい』

朝日によって目が覚めた。

時計を見るとまだ寝てもいいくらいには余裕がある。だけど、寝てしまつとこの暖かい気持ちが無くなりそうだから止めておこう。

「・・・おはよう、ぜっくん」

枕元に置かれた御守りに挨拶をする。これが私の朝の日課だ。

「ふむ、行くのか？」

「ええ、約束がありますから」

雪の溶け残りを踏み締めながら僕は駅へ向かう。

この六年間、僕は修行を続けてきた。自分の力を取り戻す修行を彼の下で。

「達者でな」

「なにを言ってるんですか。僕はまだ貴方から全てを教わっていない・・・帰ってきますよ」

「そうか」

いつもの額当てで見えない眼が今日はやけに光を反射している。柄にもなく涙ぐんでいるのだろうか？

「それに、僕はまだわかりません・・・それを学ぶためにも絶対に帰ってきます」

「・・・」

見所という見所がない駅前を歩きながら僕は白い息を吐く。一呼吸置いてから彼を見ると難しい顔をしていた。

「私の、いや・・・教えだけは頭に置いておくのだぞ」

「人間馬鹿になって人を救え、ですか？
僕みたいなのがそれを守る意味ない筈ですが、師の教えは守りますよ。そこまで落ちぶれちゃいけませんから」

駅の中は東京に行く旅行者や帰ってきた地元の人間でそれなりに込みあっていた。まあ、首都圏に比べたら普通ぐらいだけど。

「くれぐれも無理はせぬよう」

彼の言葉を最後に新幹線の扉は閉まる。

「・・・人間って一体何なんだろうね」

僕の中にある根強い疑問を再確認しながら、僕は自分の席へと向かう。

遅くなってしまった。時刻はもう八時が近い。

部活時代は何時も通りに終わったけど、掃除にちよつと時間を掛けすぎた。それでも手を抜くのは嫌だし、結局は仕方ないんだよね。

「門限に間に合わない」

女子寮の門限は八時半。電車での移動は10分で、さらに歩きで10分。だけど間に合う為には今から5分後の電車に乗らないと・・・近道して駅に行かなきゃ間に合わない。

「少し走れば・・・」

いつもの道順を無視して真っ直ぐ帰る。裏道に近い道は表通りより暗いけど、走るのに困りはしない。

冬にしては湿り気のある裏道を小走りで進む。中等部から駅への近道は必ず長いトンネルを通らないといけず、夜は不気味だからいつも避けていたけど今は背に腹は換えられない。

「・・・ここにも」

ついこの前見たばかりの浮遊霊がトンネルの脇にいた。どうやら彼

は地縛霊じゃないらしい。

「時間」

ジロジロ見ていたら気付かれちゃう。今は駅に向かうことだけ考えよう。

トンネルに近づくに連れて霊の姿がはつきり見えてくる。

（今は無視しなきゃ）

私がハッキリと幽霊なんかを見えるようになったのは・・・小学校辺りかな。兄妹である彼にいつもついて回っていたらいつの間にか見えるようになっていた。

始めはボンヤリと霞が流れたり、留まっているとしか見えなかった。霊感は今ではハッキリと見える程まで強くなった。

今では予知夢的な夢や、虫の報せみたいな物もちよくある。前者は忘れた頃のを、後者は身の危険の少し前に。

今までの経験上、予知夢はどうにも出来なかった。終わった後にハッと思い出すから。

「・・・」

『・・・』

通り過ぎる。互いに視線は合わせず、私は始めから彼が見えないとばかりに走る速度を早める。

——ゾクリ

さっきの続きだけど、後者は避けようと思えば避けられる。ただ突発的なことだから避けられるかは、わからない。

『見えてるくせに』

「——え？」

しまった。そんな遅すぎる認識が私を止めるより、反射的に振り返る方が早かった。

『やっぱり、見えてた』

近い。怖い。マズい。

十数センチまで近付けられた顔は死人特有の温かみの抜けたような蒼白さを見せつけ、目は濁っていて本当に私を見ているのかさえ疑問だ。

私が短い悲鳴と共に後退りする姿を、彼は嫌な笑みで笑った。

『君なら、私を——』

「い、いや、来ないで・・・」

今回は、どうやら避けられなかったみたいです。

木霊し続ける足音と荒い息。

霊から逃げるにあたり私はなんて間違いをしたんだろう。こんな霊が溜まりやすい場所を選んでしまうなんて。

『助けて・・・助けてくれ』

「む、無理です！私には何も・・・」

優柔不断な態度は相手を惑わす。さらにそれは自分の身を危うくする。

だから断る。自分では無理だと、他の人をお願いしますと。

霊だって助かりたいのだから、助けてくれる人を探す。でも断り続けてもしつこいのは大抵仲間を求める悪霊だ。いくら御守りがあるからといっても、なんとも来られればマズい。

「・・・？」

振り返れば、そこには霊がいなかった。

逃げ切った、そう勝手に安堵した私は胸にたまっていた重苦しい空気を吐き出す。

助かつ――

『一緒に死んでくれ』

「いや！放して！」

壁から生えたような無数の蒼白い手に体中を掴まれ、引きずり込ま

れようとしている。どの手も人間とは思えない握力で、掴まれている部分がとても痛い。

『一緒に・・・楽に・・・』

「いや、誰か！」

要領を得ない言葉を並べる霊が私を壁に押し込む。

怖い。理解の出来ない現象が。

恐い。見えない相手が。

コワイ。言葉が通じないことが。

『これで、これで・・・』

私が引き摺り込まれる姿を笑いながら見ている霊。涙を流し、悲鳴をあげる私。

絶望的だ。本当に絶望的だと思えてしまう。

——パキン——！！！！

何かが砕けるような音と共に眩しい光が私の制服から溢れた。

私

は勿論、私を捕まえていた霊でさえその光に怯む。それだけじゃなく、何かに怯えているように見える。

私はその内に走った。

私を拘束する手は苦しむように蠢いていて、悪霊は目を押さえながら恐ろしい呻き声を上げている。

「っ！」

落とした鞆を拾い上げ、全力で走った。

『待てEええeえ!』

「はあっ、はっ!」

女子中学生の中では早いと思っていた足でさえ、後ろから追ってくる悪霊を離しきるには遅かった。

ジリジリと近づく距離に私の鼓動は早く、大きくなる。それがまた堪らなく怖い。

(出口!)

微かに見えてきた街灯の光に小さな希望が見えた。

(なんで、なんで?!)

見えている出口は一向に近付けない。とっくの昔に辿り着けたはずの出口はまだ小さいまま。逆に距離を詰めていた悪霊の手があと少しで私に触れようとしている。

「なん——きゃっ！」

躓いた。見れば足首には先程まで壁から生えていた手があった。

『裏切った……な……』

「いや、いや……」

悪霊の両手は妙に緩やかで、何かを掴もうとする手の形が自分の首を絞めようとしているのがわかる。

私は眼を瞑った。目の前の現実をこれ以上見ぬように、強く。

（助けてぜっくん！！！！）

「白衣観音よ、護りたまえ！」

少しばかり低くはなつたが懐かしい声が聞こえた。

目を開ければそこにはお経のような物が掛かれた紙が私を守るように囲んでいた。

「悪霊風情が・・・僕の妹に手を出すな！」

そこには懐かしい脈打つ蒼い鬼の手を携えた最愛の兄妹がいた。

悪霊の住処となっていたトンネルから女子寮までアキラを背負っていき、彼女を女子寮の寮長に預けた絶鬼は駅にて数人の男性と少女達に囲まれていた。

囲まれる理由のわからないな。僕が何をしたって言うんだ？

「少し話があるのだが、ついてきてくれないか？」

「嫌です」

「なっ?!」

まるで最初からついて行くのが当たり前のような反応をする男性達の横を通り過ぎながらホームへ向かう。彼が麻帆良に来たのはあくまでアキラの御守が効果を無くすと思ったためであり、それを済ませば帰るだけである。

「ま、待ちたまえ！」

「・・・」

「待てと言っているんだ！」

「・・・はあ、なんですか。こんな夜中に叫ぶなんて非常識ですよ、貴方」

「巫山戯るな！貴様、何の目的で麻帆良にやって来たんだ！」

突然怒鳴りだす男性を絶鬼は嘲笑と侮蔑を交えた視線で見つめる。先程も言った通り、今は深夜も近く、そんな夜更けに大の大人が叫ぶなど酔っている時しか許されないというものだ。

「叫ばずとも聞こえているよ、これだから弱い人間は嫌だ」

「なんだと・・・！」

「五月蠅い、黙れ、何度も言わせないでくれ」

「貴様あ．．．」

今にも飛び掛かりそうな男性に対し絶鬼は内心で冷たく笑っていた。ちようどいい、と。

道中でも低級妖怪や悪霊を喰らっていたが、人間だけは手を出していない。殺人に特別な感情も、まして人間に愛着もないがそれをしてはいけなような気がしたのだ。それはただの気紛れだとしても。

だが、今回は別だ。敵意を持って来るのだから．．．正当防衛だ。

過剰を過ぎると言われるかもしれないが、その時はどうとでもする。演技でもすれば問題あるまい。

「悪いが、力付くでもついてきてもらう」

「出来るのなら、ね」

「言っ たな小僧！」

力付くで来た魔法生徒に対し彼は素直に関心をしていた。

人間にしては中々に素早い．．．が、天狗に比べれば羽虫が止まる上に人狼に比べればキレがないね。まあ、人間にしては頑張ってるかな？

魔力での身体強化というものを知らない絶鬼は彼の身体能力を地力であると考えたが、実際のシステムを知った際に憤慨したのは後々の事である。人間の悪足掻きにも似た努力は認めるが、それである程度とは情けないとは思えず、それをまあまあと思った自分が情けないからでもある。

ただ真直ぐに走る魔法生徒に対し彼はポケットに入れていた指に妖気を込める。バレない程度に集め、鋭利にしていく。

一突き、それで自分は久々に人間の魂を喰らえると思った絶鬼は悦楽にも近い歓喜を楽しみにしていた。それによる笑みはとてもあどけなく、数人の生徒達は思わず見惚れてしまう。

「沈め！」

「っは！」

腕を振り上げて自分に飛びかかる生徒に対し彼は半身だけで曝すように手刀を振りぬいた。数センチだった妖気は一気に伸び、ナイフ程度の長さに達す。

後は貫くだけ、それだけで自分は――

「ぎゃー！！！！」

「っな？！」

霊剣があと少し、ほんの数ミリで食い込むというところで男子生徒は物理法則を捻じ曲げるような直角移動を成した。いや、あれは何かに弾かれたのか？

駅構内の柱にまともにぶつかった生徒は鼻血を盛大に流し、涙で顔をグシャグシャにしながら自分が何故柱にぶつかったのか考えていた。

「危ないなあ、突然一般人を襲うなんて」

「高畑先生！」

真夜中の通りを温和そうな男性が歩いてきた。

眼鏡にスーツ、ガツチリとした肉体はどこか頼りなさそうな表情とは裏腹な何かを感じさせる。

「なぜ、邪魔をしたのです？」

「いやはや、死人が出るのを止めるのはおかしいことかい？」

「・・・そうですね、おかしくはない。ですがあれは正当防衛ですよ」

「正当防衛でも、死人が出ないに越したことはないよ。しかし、申し訳ないことをしたね。こちらの人間が粗相をしたよう

だ・・・僕で悪いが謝らせてくれ」

自分の半分くらいの年の少年に頭を下げた高畑と呼ばれた男性は深々と頭を下げた。礼儀正しく、また本人からも申し訳ないという気持ちで汲み取った絶鬼は先程までの殺意を収める。それを察知して高畑も頭をあげて気のよさそうな笑みを浮かべた。

「申し訳ありません、先生・・・お手数をおかけして」

「いや、いいんだ。なにより君たちみたいな見習いを行かせた者にも責任があるしね」

「え、どういう・・・？」

未だに鼻血が止まらない生徒は若干鼻声でありながらも高畑に聞く。
「・・・しかし、汚い顔を向けないでほしいものだ。」

「そのままの意味だよ。見習いである者に参考人の任意同行を任せたのが間違いだったんだ」

「え、待つてください！私達は・・・」

「言い訳は結構。たとえ相手が敵や侵入者であろうと、彼は生徒を助けていた。それは本来僕らのやるべきことなのだ。」

それに、何処の世界に任意同行で力を振るう人間がいるんだい。それは任意ではないよ」

煙草を取り出して一本火をつける。煙がこちらまで流れてきたため、風上へ上がる。若干ホームから遠ざかったが仕方ない・・・空気は読もう。

「君達は帰りなさい・・・君は治療を済ませたら始末書を書くこと。内容は任意同行についてだ」

それを聞いた生徒達は一瞬何か言おうとするがすぐに飲み込む。どうやら高畑とかいう人間はそれなりの地位にいるらしいな。

「お待たせして悪いね。それと、僕の生徒を助けてくれてありがとう」

「生徒って、アキラのことか」

「おや、知り合いだったのかい？」

「知り合いもなにも、兄妹だ。義理だけどね」

「なら尚の事さ。君に事情を話してもらわないと彼女まで変な誤解を受けてしまうよ」

「人間は脅迫も知らないのかな？このタイミングでその名前を出すということは説得ではなく脅迫だよ」

「そういう意味で言ったんじゃないんだけどね」

人間のヘラヘラした笑いはなんとも癪に障る。弱いくせに媚び諂うように嫌いだ。

（高畑先生・・・彼はどうも人間ではないようです）

（どういうことだい？）

（先程の霊刀、妖気が感じられました・・・真つ当な人間では間違いないありません）

（・・・だが、彼はアキラ君と兄妹だというしね。もしかしたらはぐれ使い魔なのかも――）

「貴様の召喚者は何処だ！先程の少女がそうなのか妖怪！」

「「つつ?!」」

高畑と刀子は驚き、共にその方向に顔を向けた。見れば怪我をしていた生徒を治療していた生徒が絶鬼を睨みつけていた。

傲慢ともとれる詰問の仕方。

仲間を傷つけられ、自分達が一方的に悪くなった立場からの名誉挽回の行動。

そしてそれしか知らない彼らの思慮の浅さ。

それらを感じさせる言動は二人の驚きを誘うのは容易く、同時に絶鬼の逆鱗に触れるのはそれ以上に容易であった。

「妖怪・・・だと？」

絶鬼は元は地獄の、しかも強者として数千年以上の時を生きた大妖召喚者が数に物言わせる際に呼び出す妖怪とは次元が違う。

なにより、【鬼】という在り方に誇りを持つ彼にとって低級の妖怪人間の恨み辛みで変化した魑魅魍魎と一緒にされたという事実は彼の存在意義を否定するのと同義であった。

「僕をあんな人間のなれの果てと一緒にするか・・・人間！！！」

濃密な殺気と妖気が彼を中心に溢れた。

全力ではないとはいえ、純粹な鬼である彼の妖気は駅を中心に蔓延した。それに釣られる様に浮遊霊や悪霊、魑魅魍魎の類が集まりさらに妖気と邪気の濃度が増す。

経験のある高畑、刀子、ガンドルフィーニでさえその濃度には驚いてしまう。冷静な際の彼らからすれば爵位を持つ悪魔より低い程度のそれも、冷静さを欠いた今では感覚がマヒしたままその濃度を過大評価してしまったのだ。

なれない生徒達はその濃度に吐き気と不安感を感じて膝をつき始める。

一人、また一人と膝をついた生徒を中心に悪霊達は彼らの心の弱さに付け込もうとする。

それに気づいた刀子はすぐさま妖気を払い、憑り付かれ始めた生徒は神鳴流の剣で抜う。それでも悪霊や魑魅魍魎の数の前ではあまりにも抜う速度が遅い。本来ならいち早く場を清め、次いで抜うべきなのだが清めるよりさきに生徒達の心が持ちそうになかった。

「すまない。生徒の失言は僕が謝るから、今は退いてくれないか？」

「それで許されるとでも思っているのかい？」

「頼む」

納得のいかない絶鬼だったが、大人気ないことをしたのだと自分に言い聞かせるとすんなりと怒りは退いていった。

冷静を取り戻した彼は場を清めるに足り大祓詞を唱え、数分後には駅は聖地のような神聖さを発した。その中で絶鬼は疲れと自身を蝕む聖の属性に顔を顰める。

「大祓詞ですか・・・大丈夫のですか？」

「この程度でどうにかなるような脆弱さはないよ。それに、この駅付近を払っただけなら簡易版で問題ないさ」

それでも、浮遊霊はしばらく集まるかもしれないけど。そう心の中で呟いた絶鬼の心の内は妙に軽くなっていた。憂さを晴らし、さらに自分のケジメもつけたという達成感からであった。

「すまないね、本当に何から何まで」

「ふん、人間にはなにも求めてはいないよ」

「疲れたのなら学園長室で休まないかい？終電ももう逃したし、一休みということでお茶と茶菓子くらいは出すよ」

鬼である彼からすれば少し走れば問題なく都内でホテルなりマンガ喫茶で宿は取れるのだが、高畑の御茶と茶菓子というフレーズが断る彼の心を堰き止めた。

「ふん。そ、その程度で僕が従うとでも？」

「ははは、謝罪の意も込めているんだが・・・ダメかい？」

「・・・茶菓子は何だい？」

「茶菓子だよ、茶菓子」

絶鬼の打って変わったような態度に高畑は呆気にとられてしまった。

そっぽを向いてチラチラと彼の答えを待つように絶鬼は腕を組んでいる。先程までと違い、今の彼に妖気や殺気は全くなく。逆に子供が何かに期待を寄せるようにソワソワとした感じを高畑達は感じた。

「そ、そうだね・・・学園長に僕からも頼むから結構上等な物が出ることは約束するよ」

「・・・そうかい」

それを聞いた彼の態度の変わりようはさらに早かった。何か企んでいるのではと疑っていたガンドルフィーニと刀子は次の彼の一言を聞いた際に耳を疑うほどに。

「し、仕方ないね。今回は君の頼みごとを聞いてあげるよ。
それで学園長室というのは何処なんだい？早く行こう」

どこか言い訳のような言い草と態度に高畑とガンドルフィーニは肩を落としかけ、刀子はそんな年相応な絶鬼の態度に不謹慎ながらクスリと笑ってしまった。

それらに気づくこともなく絶鬼は早く、早くと彼らを急かした。

「地獄・・・とはのう。君の本性を見せられた今でも信じられん
う」

「なら死んでみるかい？僕が少し手を加えれば漏れなく焦熱地獄に
落としてあげるよ」

御茶菓子を頬張りながらお茶で流し込む絶鬼の場違いな言葉を聞いた近衛門は笑い返すことしかできなかった。地獄など宗教の中でしかないと思っていた存在が証明されたのだ。

今まで死んだ人間は靈魂となり、次の転生元に移動すると思っていたのを彼によって否定された今、地獄に行かせてあげるなどという招待状は土下座しても願いたいものであった。

「絶鬼君。確認なんだが、君のような鬼は簡単にこちらにこれるのかな？」

「無理だろうね。僕以上、覇鬼兄さんや眠鬼並みの鬼なんてそうそういないから。」

それに来るだけでも数年以上の歳月がいるうえに、帰る事も出来ないんだ」

「はて、行きが可能なら帰りとして可能じゃろう。何か理由があるのかね？」

「僕は焦熱地獄の壁を三年の月日で登りきったけど、次に地獄の穴をあけるとそれは本当に穴をあけるだけなんだ。つまり、詳しい場所の指定できない穴は地獄の最下層である無間地獄にまで直結している。それはつまり2000年以上落ち続け、戻るのにもそれ相応の時間がかかる・・・ハッキリ言って片道通行としか言いようがないね」

2000年などという時間の感覚が今一掴めない二人でも片道通行というのはハッキリと理解できた。つまりこれでも帰れない場所にくるモノ好きな妖怪はそうそういないということだ。

「しかし、君はなぜアキラ君の兄妹をしているんだい？」

「昔、と言っても10年くらい前に大河内夫妻に拾われたんだ。その時は僕も体の再構成が辛くてね、五歳くらいの姿だったんだ」

「よく君のように気高い鬼が人間と共に過ごそうと思ったね」

「僕だって最初はある程度でも力が戻ったら母さん達を喰らって糧にしようと考えただけど・・・今はちよつとね」

不安を煽るような言葉を残した絶鬼は意味深な態度でお茶を飲む。その際に浮かべた苦々しい表情はどうも御茶の苦さだけではないようだ。二人は表情から掬い取った。

「それに、どうせ人間の寿命なんて僕からすれば一瞬だ。別に食わないといけないという理由はないさ」

「つまり、今の君は人間を喰らう気はないと。そう考えてもいいのかな？」

「悪霊や魑魅魍魎を抜かすのなら、生者を喰らう気はないよ」

絶鬼の表情をしっかりと見つめていた二人は確かにその感情を掬い取った。だが、それはあくまで『今は』という間だけの気紛れではないのかと疑ってしまう。いけないことだというのも分かりながら、それも人間の性なのかと自分達の臆病さを彼らは嫌悪する。

（しかし、地獄とは・・・驚いたのう）

（学園長、どうするんですか？）

（こんな情報など公開できるわけがないじゃろう。

地獄じゃぞ、地獄。東西に関係なく地獄という概念は宗教を通じて悪徳を犯した者が送られる場所じゃ。そんなもの公表してみろ・・・考えなしの偽善を振りまく者たちが暴走しかねんぞい）

（・・・やはりそうなりますか）

（自身を正当化するためならばその程度の理由があれば十分じゃて。自分勝手に理解し、利用するのが人間の弱い部部じゃよ高畑君）

地獄という存在を公表せず、彼らは自分達の中のみになってしまうことを密約する。

地獄というのは恐ろしさだけでなく、悪人が落ちるという名分もある。それは悪人を殺しても罪にならないと、悪人はすべからず地獄に行くのだという理由を作らせてしまう。

それはいけない。それではダメなのである。

悪人であれ、殺人者であれ救いはあるべきなのだ。救いは与えるべきなのだ。

そうでなければ一体どこに救いがあるというのだ？

（地獄の公表は絶対厳禁じゃ・・・もしこれが下手に広まれば面倒じゃぞ）

現代の宗教の力が弱まりつつある中で、下手に地獄などという存在を肯定すれば宗教の力を悪用するものも出かねない。また不安から彼の兄妹である大河内アキラが狙われる可能性も出てくるという懸念から二人はそれぞれの思惑で頷き合う。

方や世間の事を思い、方や生徒の今後を思つての事と規模こそ違つがそれは彼らがそれぞれ背負う責任からかもしれない。

「それで、絶鬼君はこれからどうするのじゃ？」

「青森に帰り修行の続きでもするつもりです」

「修行？」

「・・・そういえば、高畑君から大被いをしたと聞いたのじゃが、なぜ鬼である君がそのようなことを？」

「答える義理はない・・・と言っても聞くつもりでしょう？」

「フオフオフオ、すまんのう。まあ年寄りの好奇心じゃと思ってくれんかのう」

「ふう。実を言うと僕はまだ全盛期の力が戻っていなくてね。力をそこまで使うような機会もないだろうけど、使わないに越したことはないんだ。

それに場を清めても多少辛いだけで僕にはそこまでの意味を成さないから悪霊退治とかには便利なんですよ。それに全てを全て力でねじ伏せるのは少々飽きたので」

暇つぶしですね、という彼の答えに二人は顔を歪める。力で解決するのは簡単だが、それでは面白くないという答えはどこか傲慢さを備えておりあまり好印象を受けなかった。

「して、君の師はどなたかの。君の力を聞く限りかなり高名な者なのでは・・・」

「無限界時空。それが僕が今師事している人間の名前です」

無限界時空という名前を聞いた二人はこれまでにない驚愕を味わうことになった。

その名前こそ十年前に突如出てきたものだが、妖怪や霊の除霊のスペシャリストとして数力月でその名は世界に轟くほどであった。

退魔としてのエリートといえば浦島や蒼月、他に日暮といった一族。組織で行けば神鳴流を始め、超自然災害対策室と多岐に存在する。

その中で、無限界時空というのは個人であり。しかも彼はどの組織にも所属することなくその名を広めた。それだけの力と実力、そして人格を時空は有しているのだ。

彼がその名を大きく轟かした事件には高畑も少しばかり関わっているが、それはまた別の話である。

「じ、時空さんが君の御師匠なのかい?!」

「そこまでどうようするような人間じゃないですよ。実際には。確かに実力も高いですし、人間もできていると思いますがケチですしなにかと頑固ですから」

「しかしの、今や彼は霊能力者という枠付に収まるような人物じゃないんじゃないよ。

本国も彼を是非とも【立派な魔法使い（マギステル・マギ）】としての称号を与えたいという者もあるしのう」

「そんなもののあの人は欲しがりませんよ。逆にいらないと突っ返されるのが落ちです」

学園長の言うことも事実である。実際に彼の所存を突き止め、彼にその称号を与えようとする動きもあったのだ。だが、それも魔法使いではないという理由から却下された今でも魔法使いの中には彼を尊敬する者は少なくない。

十年前、当時の少年達を中心に彼を尊敬するものは多い。彼と面識ある者達は揃って彼を尊敬し、敬愛していたのだ。

「ともかく、僕は師匠の元に戻り早く修行したいんです」

時刻は丑三つ時。夜の住人達が最も活気づく時間に絶鬼は少女と対面していた。

そこには何か甘酸っぱいものは微塵もなく、あるのは殺伐とした張

り詰めた空気の身である。

「おい、似非ぬらりひょん・・・」

「なにかのう？」

「なんだこの展開は？答えによつては今すぐに地獄に叩き落とすぞ」

「ふお、ふお、ふお。なあに、簡単な力試しじゃよ。」

これから君がこの麻帆良に滞在するに当たり、時には助っ人として呼ぶかもしれない。そんな時に力もわからぬ者では安心して背も預けられぬのが道理という物じゃよ」

「敵意しか持たれていない時点で道理も何もないと思うがね」

「ふお、ふお、ふお」

麻帆良に滞在。助っ人。背を預ける。

これらの言葉からわかるとおり、絶鬼はしばらくの間だけ麻帆良で過ごすことになった。本音を言えばそんな馬鹿げた事につきあう必要もなかったのだが――

『アキラくんの疑いが晴れるまででいいんじゃないよ』

――とのことである。

脅迫じみた説得であつたが、自分のせいでアキラが不必要な扱いを受けるのは不本意でしかなかった絶鬼にとってこの誘いを断ることはできなかった。なにせ問題を大きくしたのは確かに自分であり、ケジメはつけるべきなのだと本人も自覚しているからだ。

「それでは、対戦相手は彼女・・・桜咲刹那君じゃ。

彼女は神鳴流の使い手での、まあ年は幼いがこの学園でもそれなりの使い手じゃ」

「おい」

「なにかの？」

「なぜ近接戦闘の手段の少ない僕に、ガチガチな近接戦闘のエキスパートを寄こす？

しかも退魔組織である神鳴流の使い手だと・・・とうとうボケたか人間？僕以外に迷惑かける前に安楽死と死後の苦痛がそんなに御望みかい？」

「孫の晴れ姿をみるまで死なんよ」

「殺せば死期も関係ない」

「爺のささやかな願いも聞き入れんとは・・・御主は鬼か！」

「なにをいまさら」

そんな遣り取りを見ながらも刹那の気迫に一切の迷いは産まれなかった。絶鬼がもう一度彼女を見るが、そこには明確な敵意がしっかりと存在している。

「それでは、始め」

戦闘は、絶鬼の防戦一方で進んでいった。

刹那の剣の前に絶鬼は避けることしかできず、触れれば甚大なダメージを受けることを知っている少数の人間はそのまま無様に負けるのだと思っている。

その中でも高畑と刀子、ガンドルフィーニや神多羅木等の一部の実力者には戦闘のおかしさに気付いており、彼らには刹那が少しずつ焦り始めていることがわかっていた。それでも一心に攻撃をし、避け続ける絶鬼という構図は戦闘に参加してまだ数年しか経っていないような生徒には刹那の優勢にしか映らない。

「ちょこまかと！」

刹那の苛立ちにより寸断された街灯を見ながら絶鬼は随分な物言いだと呟いた。

先程の攻撃、どう考えても人間が愛ければその部分が簡単に切り飛んでいる。例えそれが妖怪などの者達でもだ。

それを考えればちょこまかなんて言葉普通は言わず、なにより真剣を使うなど正気を疑うとしか言いようがない。刹那としてはここで不確定要素で、しかも妖怪変化の類でしかない絶鬼を還すべきだと思っっているのだが・・・絶鬼に関しては事情が違うのだ。

普通の妖怪たちが異界から召喚、もしくは上位の者なら空間移動で来る際には大概実態によりちかい分身で来るのに対して絶鬼は本体だ。こちらの死は彼の死は繋がる。それでも生命力が次元違いである彼ならば首を撥ねられようと、吹き飛ばされようと時間と妖気さえあれば元に戻るのだが現在節約している身分としてはそれは避けたいのである。

「君も存外に単細胞だね。これは試験であって殺し合いじゃないんだよ?」

「黙れ妖怪!」

「・・・少し、頭冷やそうか」

妖怪という単語に頭の来た絶鬼は字ランのポケットにしまっていた経文を取り出すと鞭のように刹那へと伸ばす。

彼女もそれを断ち切ろうとするが、妖気と霊力により強化された経文は野太刀に絡まりつく。そしてそれは刹那の手を縛り、数秒後には彼女を雁字搦めに縛り上げた。

「クソ・・・」

気の強化により経文自体を引き裂こうとするが、絶鬼が何かを唱えると刹那は電撃にでも打たれたかのように痙攣する。力の抜けた彼女に気を練る余裕も、また経文を引きちぎる力もなく地面に横たわるだけとなる。

それを見届けた近衛門は終了の合図を出し、彼の実力を認めた。

そんな中で刹那は絶鬼を睨みつけ、絶鬼も彼女の異常な反応に奇異な眼差しを向けていた。

一日目 S H R 『御待たせしました凄い奴?!』（後書き）

これからは作者が調べた妖怪や、漫画の妖怪などを中心に話を進めていきます。

それでもネタは尽きるものなので、読者の方々の中でこういった妖怪や幽霊が好きだというものがあればドシドシコメントをください。それをネタに筆が進むので。

ニコ動のようにニコニコしながら御読みになったり、コメントしてくれるのが一番だと思うのであまり遠慮なんかしないでください。

それが作者の気分を軽くしますので。

1日目 1時限目：通リゃんせの二番目って、意外に恐いね・・・創作だけどち

通リゃんせ 通リゃんせ

ここはどこの 細通じゃ

天神さまの 細道じゃ

ちつと通して 下しゃんせ

御用のないもの 通しやせぬ

この子の七つの お祝いに

お札を納めに まいります

行きはよいよい 帰りはこわい

こわいながらも

通リゃんせ 通リゃんせ・・・

1日目 1時限目：通リゃんせの二番目って、意外に恐いね・・・創作だけどち

カリカリ。

ペン先が静かに紙と擦れる音は部屋に嫌に響く。

いつもならルームメイトの笑い声や音楽がBGMになる部屋はいつもと違い静かだ。

「・・・（カリカリカリ）」

理由はある。とっても簡単で、単純明快な理由だ。

人が消えた？

私の集中力が無我の境地に達した？

独裁者ボタンでみんなを消した？

「・・・（カリカリカッカッ）」

なにそれスゴい。現実と妄想の区別もつかないの？

そんなファンタジーを現実求めちゃいかんでしょう。現実はおつとシビアで、ノンドラマティックで、厳しくて、悲劇の集大成みたいなもんよ。

非現実漫画や、アニメ、ドラマに求めるものであり、現実にはラッキーやささやかな幸福を求めるべきなのよ！

だから二次元やディスプレイの中にリアルを求めるなんて無粋よ。現実には特別な能力を求めるなんて中二病患者決定！今すぐ麻帆良工學高等専門学校にモルモットとしてぶちこんであげるわ、私が直々に！

カリカリ・・・カリ・・・カッカッカ・・・

「・・・疼くわ」

そうよ。現実にはそうそう魔法とか、超能力とか、特殊能力なんかないのよ！

「私の右手が疼く・・・封印している魔が、求めて・・・」

中二病乙w大学病院はここですか？w w w

B J先生や、朝田先生が待ってますか？w w w w w

w w
ようこそ、この素晴らしい惨殺空間へw現実逃避者のユートピアw

中二王子やそげぶさん、オカリンのいる遙か遠き理想郷はここですか？片道切符はどこで売ってるんですか？の海への逝き方は首吊りでおk？w w w

「・・・なぜ、今日なの」

もー、何もかもダメよね。日本は＼（＾O＾）／w癒着が酷いものw w

・・・働いたら負けよね、負け。働きたくないでござるw w w

「なんで今日に限ってゆえ吉ものどこもないのよ？！
図書委員の仕事もわかるけど、私も見てよね！死ぬわよ、寂しすぎて死ぬるわ！

つか、まず孤独死より先に×切で死ぬ！寂しさじゃなく、×切に殺される？！？！？！？」

現在、原稿は十枚がベタ塗りのみ。下書きのみの原稿は二十枚。

×切は・・・九時間後。

「エーリン、エーリン、help me エーリン（*、*、*）
」

もう我慢の限界！無理だね、私は壊れるよ。壊れてやりますとも！

後九時間、九時間で原稿仕上げる？

無理に決まってるじゃない！

部屋を限りなく無音にしても無理なのに、これ以上どうしろと？！
最後には自分の鼓動も煩わしくなってペンで貫けと？！

「あゝん！誰か助けてゝ！」

部屋を走り回り、ゴロゴロ転がり、泣き叫んだ。この程度、×切間
近な私を知ってる人達にとって普通と言うのか？

何故、誰も様子を見に来てくれない？

「神はいない・・・仏さえも・・・」

ひとしきりあたり散らすと頭が冷えた。それでももう少し行ける・・・
行けなきゃ死ぬしかないわ。

生きるか死ぬのか言っちゃってー、よ！

「はあ・・・やりますか」

この程度の苦難、パル様にとって軽い軽い！

私を殺したいなら今の三倍の原稿が、3割しかない×切期間を用意
なさい！

・・・嘘です御免なさい。

「あれ？」

微かな風を感じたことで気が付いた。ドアが、少しだけ開いている。

夕映達がすっかり締め忘れてたのかな？

「仕方ないわねえ」

気付いたらそれを片付けないと気になってしまつ。ダメだダメだと考えても、集中力が乱されるなら片付けないと・・・

「・・・え・・・誰・・・？」

動きかけた足が止まつた。時間がとまつたような錯覚でありながら、心臓だけは冷静に脈を早くする。

おかしいな・・・いくら疲れているからといつてもそこまで・・・
そつよ。扉を閉めなきゃ。気が散るじゃない・・・

「・・・あ、ああ・・・」

差し伸べた手は前ではなく後ろへ進む。体もそれに従い後ろへ。

カタン・・・

もう後がない。そういうかのように机にぶつかった。

私を見る眼。生気が抜け落ちた様で、それでいながら何かを求めている眼。

「い、いやああああ！！」

「本当に見たのよ！嘘じゃないって！」

「・・・と言われましても」

「あ、その眼は信じてないって眼だねユエ吉！」

「幽霊なんて非科学的です」

夜が明け、未だ8時少し前だというのにクラスは騒がしかった。

「のどか！のどかは私のこと信じてくれるよね？ね！」

「あ、えと私は・・・」

縋るように手を握りながらハルナはのどかを見つめる。潤んだ瞳は捨てられた子犬を思わせるが、拾った時点でそこに責任は発生するものだ。

そしてのどかは拾わぬ方を選ぶ。

目を伏せ、握られた手から力を抜く。たったそれだけでハルナは彼女の意志を理解した。

「ゴメンなさい・・・幽霊は怖いから・・・」

「そ、そんなあゝ?!」

「ハルナ。のどかはそういったホラーテイストは嫌いです。それに、のどかは信じないとは言ってます。ただハルナを信じれば幽霊を肯定したことになり、そしたら私達は幽霊のいる寮に住んでいるということになるからです」

「あ、なるほど」

ハルナとてのどかが幽霊を嫌っているのは知っている。彼女らとて悪気があったわけではない。

「あぶぶぶ!ウチの寮って幽霊さんが出るんですかあ?!」

「ふ、フミカは怖がりだなあ。ゆゆ、幽霊なんかいないに決まっているじゃない！」

「足が震えているでござるよ」

「か、楓姉〜！」

「知ってるかい刹那？」

「いや、そんな気配は・・・」

「幽霊やってアスナ」

「これを出汁に高畑先生を・・・ぐふふふ」

「嫌やなあ、幽霊って・・・」

「実は女子寮は墓場の上に建てられたとか?!」

「どこのゴシップよ、まき絵」

ただ思慮が足りなかっただけである。

小さな範囲で不安を煽る。人民誘導と考えれば悪くないが、褒められる状況ではない。

小さな波紋がいつか大波になる。しかし、2 - Aは良くも悪くも小さくはない。

パパラッチの少女を始め、そういった話は不安を小さくするために人の口を緩めてしまう。

そうなれば噂は止まらない。波はいつしか防波堤では防げなくなるのも時間の問題ということだ。

（・・・悪霊じゃないけど、このままだとマズいかな？）

話は少し離れていたアキラにも届いており、彼女は絶鬼の太鼓判が押されるくらいに霊感が強い。件の霊の存在も薄々気付いてはいた。

なら、何故止めないのか？

（話したらさらに恐がるし、そうすると悪い霊も呼んじゃう・・・）

悪霊などは不安や恐怖に聡い。薄気味悪い場所に霊が集まるのは、人々の不安が集まるからであり彼らもそうだった近しい感情で死んだからだ。

類は友を呼ぶ、とは意味が違うがそんなものである。

（ぜっくんに相談してみよう）

「女子寮に幽霊とな？」

「はい。既に学園中に噂は広まっています。
どうします？流石にこのままにするねは不味くありませんかね？」

学園長室にて対面するようにタカミチと近衛門はお茶を啜っていた。

「噂など時間が経てば消え入るものじゃが、調べる必要はあるのう」

「たいしたことないと近衛門は言うが、彼とて無責任に言っているわけではない。ただ今までの経験上そうであったからに過ぎない。」

「霊ならば、神鳴流の出番じゃな・・・刹那君と刀子君を呼んでくれんかの。彼らなら問題なかるうて」

蓄えられた自慢の髭を触りながら近衛門は軽く言った。そこからは信頼と信用が感じられたが、それはあくまで2人ならである。

「それでは皆さん。霊を退治するために調査ですわ！」

余計な人間が場を仕切る。端目から見れば余りにもでしゃばった行為でしかない。

「お姉様・・・やはりここは専門の御二人に任せた方が」

「なにを恐がっているのですかメイ！」

我々は世の為、人の為にいるのですよ。それを恐いからと言って・・・」

義姉の言葉もわからなくもない。自分が幽霊を恐がっているのも間違っていない。

だが、それでも何も知らない素人が首を突っ込んで良いわけじゃない。なにより足手纏いにしかなりそうにないと彼女は考えている。

それは世の為、人の為の行為の障害にしかないのでは、と後ろ

髪さえ引かれていた。

それでも彼女——高音——に従うのは彼女を慕い、彼女に逆らえないからである。

（刀子さん……どうします？）

（退魔師としては返すべきなのでしょうが、教師としては彼女達のヤル気は尊重するべきでしょうね）

二人の目の前で威風堂々と勇み足を踏む高音を見ながら刹那は刀子の教師としての態度を見て尊敬してしまつ。

（退魔師でありながら、教師としての立場もしっかりさせている・
・流石は刀子さんだ。
それに比べ私は・・優柔不断だな）

半妖としての自分。

神鳴流としての自分。

女子中学生としての自分。

このちゃんの護衛としての自分。

私は一体どの立ち位置に在るべきなのでしょう？

妖怪として闇に生きる。

それは1人孤独に生きること。また自分を捨てた存在を認めることになるのでは・・・

（嫌だ・・・）

神鳴流剣士として生きる。でも自分は神鳴流を去った身だ・・・今さら席を戻すなど。それに、いつか自分の正体が気付かれてしまい退治されるのでは・・・

（死にたくはない・・・）

女子中学生として生きる。

でも、それは神鳴流を完璧に捨てることになる。長の気持ちを裏切り、また幼い頃の誓いを自ら破ることになる。

（そんなんあかん・・・）

このちゃんを守る為に生きる。

そうや。うちはこのちゃんを守るために強くなったんや・・・なら

うちはこのちゃんを守るために生きればええ。今はそれだけで・・・

「アナタ！何をしているんですか？！」

甲高いヒステリックな声で思考の海から釣り上げられた。

いつもの癖とは言え、今は仕事だ。このちゃんを不安がらせん為にも頑張らな！

「アナタ！何をしているんですか？！」

「なんだい、こんな夜遅くに騒がしい。レディとして恥ずかしくないのかい？」

「ここが女子寮だとわかったの行動ですよ！」

「知ってるし、わかったの行動だよ」

「じゃあ何をしてるんですか！こんな夜更けに、女子寮で！」

女子寮に入っすぐ、高音は女子寮を我が物顔で歩いていた絶鬼を捕まえた。

彼とて人間の集まる場所に好きで足を運んでいるわけではない。アキラに頼まれもしなければ梃子でも動かないだろう。

『絶鬼君、実は女子寮に浮遊霊が出るらしいんだけど・・・』

『面倒だ。何より人間がどうなるうが知ったことじゃないね』

それは放課後のこと。時間にすれば6時近くだろうか？

ホテルで学術書を読んでいたらアキラがやって来た。そして彼女の来訪した訳を聞いた僕は呆れるしかない。

女子寮に霊が出たからどうにかしてくれ

馬鹿らしい。本当に馬鹿らしいね！

何故鬼である僕が人間のために労を費やさねばならないんだ？

鬼といえは人間を襲い、殺し、喰らう存在のはずだ。

悲鳴を悦び、恐怖に塗れた顔を笑い、地獄を地獄たらしめる存在のはずだ。

それが人助け？ちゃんちゃらおかしいね！

『アキラ、忘れてるかもしれないが僕は鬼だよ？
人間の天敵である僕が人助け・・・そういうのはね、仏に頼むものだ』

『絶鬼君』

『誰かを殺すならわかるが、誰かを助けるなんて鬼のすることじゃない』

『・・・』

俯いていくアキラを見ながら僕は正しいことを述べていく。

鬼にとって人間など食物か、暇潰し——殺す為——の玩具にか過ぎない。

掃いても、掃いても沸いてくる物を何故わざわざ助けないといけないんだ。そんな非効率的な行為は馬鹿らしいとしかいいようがないよ。

『・・・わかった』

『わかったなら馬鹿らしいことを頼まないで・・・なんで泣いてるんだ?!』

沈んだ表情に涙。トラウマを刺激する表情がそこにあった。

『私が馬鹿だったんだよ・・・ごめんね』

『ま、待ってくれ!なんで泣いてるんだ?!』

『ごめんね』

それから引き止める僕を無視し、手をつかんでも無理矢理に帰ろうとする彼女をどうにか説得して——謝って——こうして除霊に来ている。

真夜中の寮に忍び込む手引きをしてもらい、霊水晶で調査を進めていった。その間は始終無言で、新しい地獄を見せられた。

僕自身が悪いという罪悪感を刺激し続ける。正直肉体的な責め苦よりキツイ。

「除霊、出来るのですか？」

「君を縛った経文があるじゃないか」

「・・・」

「そういう表情はやめておきな。可愛い顔が台無しだよ」

凄まじく嫌そうな表情で僕を見ていた彼女の顔が今度は真っ赤になる。

「なにより、僕からすれば君達の方が除霊出来るのか甚だ疑問だよ」

「馬鹿にしないでくださいます！」

我々はプロであり、そのために来たのですよ！」

「お姉様、もう少し静かに・・・」

耳元でキーキーと人間が騒ぐ人間を蔑みながら前を歩く女へ視線を移す。

少なくとも、この中で一番練度が高い気を発している。だが何故だろうか……

（運が悪そうだ……守護霊がついてないからか？

——まあ、代わりにお齒黒べったりがついてるが、かまうまい）

カツカツとヒールの音を鳴らす刀子を見ながら自分に微笑むお齒黒べったりを無視する。

「それで、あのセクハラな経文はなんですか？」

「（セクハラ）……白衣観音だ。妖怪等に対する、まあ武器かな。他に、霊水晶と呪符に筆だ」

「呪符はわかりますが……水晶に筆なんてなにに使うのです？」

「刹那……貴女は本当に退魔の人間ですか？鍛練だけじゃなく学も付けないさい」

「刀子さん?!」

「霊水晶とは霊を視覚化及び霊波を増幅させる霊具で、儀式などに

よく使われたり探査などに使われたりします。

筆においては神鳴流でさえその流派があるというのに・・・」

あからさまな溜め息を吐かれた刹那は顔を真つ赤にしながらスカートを握り締める。余程恥ずかしいのか、はたまた勉強を怠ったのを知られたからかはわからないが絶鬼があまり興味がないのは確かであった。

「筆などを使う場合、大概は陣や言霊を描くのが主流です。神鳴流でも凡字を用いた降霊や結界を行っているはずですよ」

「あ・・・」

「まったく」

女子寮の各階を歩きながら異常がないかを調べていた一同であったが、特にこれといった成果を挙げるには至らなかった。

それに関して高音は噂は噂でしたわね、という言葉で場を纏めよう

とした時だ。悲鳴が女子寮に響き渡る。

急ぎ階段を駆け降り、悲鳴が聞こえた方へ迎う。そこはちょうど風呂場の入り口で、その前には裸にバスタオル一枚の少女達がいた。

「どうしました?!」

すかさず年長の刀子が走りより彼女達の肩に手を置き安心させる。

「絶鬼、貴方はあつちを向きなさい!」

「あみばっ?!」

次に刹那が僕の顔を鞘で殴り飛ばし、彼女達に変な心の傷を作らないよう配慮した。

「霊が出ましたのね!どこです、さあ私がお相手しますわ!」

「あわわわわ」

・・・こいつらは論外だ。

怯える少女を宥める刀子と、絶鬼を嗜める刹那。勇みながら霊を探す高音と挙動不審な佐倉。

足並みがてんでバラバラだと思いながら閉じていた目を開けると、そこには冷たい視線で見つめるアキラがいた。

「絶鬼君・・・お話しよう・・・」

「なぜ?! 理不尽だ!!」

——っというかいつの間に!!」

「ちょっと・・・頭冷やそうか・・・」

「ま、待て・・・やめろ! 死にたくない!!」

集まってきた生徒達に嘘の状況を刷り込んだ面々は、現場検証として風呂場に入り込んだ。

「これが女子学生の為の風呂・・・だと・・・?!」

「麻帆良女子寮はかなりの人数がいますから、水回りも自然と大きくなったんです。驚きましたか？」

巨大な健康ランド顔負けの入浴施設に圧倒されている僕の横では、この施設について説明する佐倉メイとアキラがいる。

ちなみにアキラは僕に依頼した本人だと言い、ついてくることをこり押しで許可させた。

説明を受けていく中で極大な風呂を初め、サウナやジャグジー。他には薬風呂や日替わり風呂まであるという。

見た目も観葉植物などで彩られた室内に味気なさは存在せず、一般人なら間違いなくレジャー施設と勘違いするだろう。

「僕が・・・——」

「え？」

「どうしたの絶鬼君？」

「僕がドラム缶だというのに・・・」

最初、メイとアキラは彼がなにを言いたいのか理解出来ずにいた。

「10年近くずっとドラム缶で入っていた風呂とコレが同じ・・・？」

いや、違う。コレは風呂じゃない・・・」

10年近くもドラム缶風呂で過ごしたという話に2人は退いてしま
う。

彼の事情を知るアキラでさえ引きつらせてしまう程に、絶鬼の顔か
ら表情は抜け落ちていた。

「壊そう・・・」

『はい?』

「そうだ、壊せば良いんだ・・・それが一番なんだから・・・」

勿論、この後で本当に行動に移そうとした彼は彼女らにボコボコに
されたという。

「世の中理不尽だ・・・」

「アキラ、まだ言ってるよ」

「放つといてあげて」

「なぜ、なぜここまでの格差が赦される？」

「アキラ・・・」

「絶鬼君ね、青森に行ってからはずっと山で生活してたらしいの」

縛り上げられた絶鬼は調査チームから外され、アキラに預けられることになった。

女子中学生の部屋に同年代の男子を入れるのに刀子は抵抗があったのだが、2人が兄妹だとわかると仕方ないということで彼女に絶鬼を預けることにした。

ルームメイトであつた夕奈も最初はアキラが彼氏を連れてきた！とはしゃいだが、事実を知ったときは落胆しながらも預かることを了承した。

「あー、絶鬼さん？」

「理不じ——なんだい？」

「とりあえず暇だし、ゲームでもしませんか？」

「げーむ？」

「あれ、もしかしてゲームも知らないんですか？」

そついつてビデオデッキからゲーム機とソフトを取り出した夕奈は説明を始める。

「簡単に言えば遊びですよ。

画面の中でキャラを操って戦ったり、物語を進めたり、友達と対戦したり・・・」

説明しながら機器を設置する夕奈は少し緊張しているのかいつもより声が堅く、動きもぎこちない。

それでも手慣れたるために準備は数分もかからずに終わり、今度は実戦でゲームを教えるようだ。

「最初は簡単なプニプニから・・・」

それが鬼の恐さを知るなんて私は考えていなかった。

「ハハハハ、コレで御仕舞かい！」

積み重なる屍の山に鞭を打ち付けるように絶鬼君は高笑いをしている。妙にイキイキしているのは、たぶん楽しいからだろう・・・趣味悪いよ。

積み重なる屍は涙や、悔しさで顔を歪めながら絶鬼君を睨み付けている。それでも適わない程に彼は強かった。

「うつ・・・まだ、まだあ！」

「もう、いやあー！」

「お姉ちゃん頑張です！」

「無理だよあんなのー?!」

「フハハハ！誰も余に挑まんのか？」

余は渴えたり、余は餓えいたり、余は求めたり！

余は、余を倒せる存在を求める！」

現在、怒涛の三十人抜きを果たしている絶鬼君。

現在41勝13敗。その内、6敗がプニプニになれるまで夕奈に惨敗し、残りも新しい人の癖に慣れるために各一敗したくらいかな？

正直絶鬼君がこんなに強いなんて思ってなかったな・・・でも、ちよつと――

「ぜつくん、ちよつと頭冷やそうか・・・」

「ハッ、余に挑むというのか人間？」

「アキラゝ、仇はお願いゝ！」

「パル！アンタなら、アンタなら殺れるわ！」

「このまま負け続けは悔しいですから、リベンジです」

「ハハハハ！足掻け、足掻け！

余を存分に楽しませろ！余の渴きを癒せ！余の羨望を実感させろ！」

こんなテンションでスタート。

「うわっ、なにあれ？！まだ始まったばかりで6連鎖だよ！」

「いやー！邪魔プニが、邪魔プニが私のプニを埋めるゝ?!」

「つく、惜しいですが打ち消すため・・・」

「甘いよ、ぜつくん」

「なん・・・だと・・・あれを返すだと?!」

「ちゃんと利し付きだよ」

「つく、子癩な!」

絶鬼とアキラの争いに揉まれる形のパルは既に開始数十秒でばたきゅ。

夕映はなんとファイバーで邪魔ブニを返済していくが、どちらかがファイバータイムに入ると最後の抵抗も虚しく倒れた。

悔しさで拳を握る夕映とエクトプラズムを吐き出すパルを余所に場はヒートアップする。

絶鬼によるデカぶにの連鎖という連鎖。回数を重ね、連鎖を交えた攻撃は一撃一撃が重くなる。

だがアキラも負けてはいない。チビぶに連鎖を的確に、それでいて最短で連鎖させて何度も全消しさせていく。

一進一退の攻防戦は深夜を間近にしながらも部屋を盛り上げていく。

「アキラってこんなに強かったの?」

「ううん。いつもならパルにも勝てないよ・・・」

互いに画面に集中しているためか周りの話が全く聞こえていない。
だが、聞こえてくるものもある。

『うらやま・・・しい』

「「っ?！」」

2人の手が止まった。

ゲームは無情に進んでいく中で、彼らは声の聞こえた方に意識を集中した。

いる。

わかる。

感じる。

「え・・・誰、アレ？」

誰かが締め忘れた扉。そこから身を滑らすように中を覗く影。

「ま、まさか・・・」

「幽霊?!」

『キヤーーーーっ!!!!』

少女達が悲鳴を上げる。

混沌とした室内で、絶鬼は重そうに腰をあげる。

「さて、退治たい——」

「絶鬼君。退治はダメ」

「は？」

すぐさま筆による退治を行おうとするのをアキラが止める。騒ぎ続ける室内で彼らは静かに見つめ合った。

「・・・理解に苦しむよ、死人に優しくするなんて僕には理解出来

ない」

「でも、ダメ。あの人達だって好きでああなったんじゃないんだから」

絶鬼は溜め息を吐くと静かに経文を開き、入り口に向かい広げた。

「南無大慈大悲、救苦救難、廣大靈感、白衣觀世音・・・」

静かにお経を読み続ける絶鬼と周りの温度差が次第に場を沈めていく。そしていつしか全員が絶鬼に注目していた。

そしてお経が終わる頃には霊は安らかに成仏していった。

「君達はまだここにいるんだ。
後は僕がなんとかしてくる・・・」

女子寮を出た絶鬼は道すがら壁や電柱に鳥居に似た絵を描いていく。

5メートル間隔で書いていた絶鬼は地図を見ながらある場所へ向かう。

「貴方は先程から何をしてるのですか！

悪霊は女子寮に出るというのに、離れるばかりじゃないですか！」

「喧しいな。文句を言うなら帰ればいいさ」

「な、なんですってーっ！」

煩わしそくに絶鬼は高音に言い放った後に彼はまた鳥居を描く。既に始まって20分弱、彼女にしては我慢した方であろう。

「・・・絶鬼君、何をしてるのですか？」

「何度も言わせるな、女」

「説明くらいならかまわないのでは？」

それに、先の長い刹那にとっても貴方はいい手本になるかもしれないから」

「手本、ねえ」

「ええ、貴方の遣り方は実に丁寧で確実です。余程いい師の下で努力したのがわかりますよ」

「そうでもないさ」

無愛想に言い放った絶鬼の口調とは違い、顔は若干はにかんでいた。嬉しいのだろう。その証拠に話しだす彼の声は弾んでおり、そんな彼の様子に刀子は年相応な反応が出来るのだと知り、笑ってしまう。

「寮に出たのは別に悪霊じゃない」

「ですが、実際に・・・」

「ただ覗かれただけで、別に襲われたわけじゃないだろう。」

窓ってというのは別の世界を覗く作用があるんだ。霊達にとっては現世を覗ける窓になるんだ。死者が生者を羨むのに何か不思議な所があるかい？」

「それは・・・」

誰だって死ぬより生きている方が良いに決まっている。誰だって死にたくないものだ。

「これで、終わりだ」

「ここって・・・」

「龍宮神社？」

なぜ、ここまで・・・」

「女子寮に出たのは無縁仏さ」

「無縁仏？」

「無縁仏ってのは、供養してくれる人間がない霊達のことだよ。勿論、無縁仏でもまとめて供養する寺はある。けど、そんな形式的な物で成仏出来る者ばかりでもないんだ・・・。だから供養するんだ、自分で自分を」

無縁仏というのは最初から供養してくれる相手がいなかった訳ではない。最初は自分の息子や甥、親や友人など誰かしら供養してくれる者がいたはずなのだ。

では、なぜそういった無縁仏が出て来てしまうのか？

理由としてはいくつかある。だが、最たる理由は【時間】であろう。

代を重ねるに連れ子孫が途絶えたり、友人や親戚などが死んだり、時間が経つに連れて忘れ去られていく。そうなるまでに成仏すればいいが、出来なければ自分自身でしか供養するしかなくなる。それが無縁仏の始まりだ。

「それに、女子寮はちょうど霊道らしくてね。

たぶん、あの女子寮では噂好きや君達みたいな退魔の人間。魔法使いが多かったから霊が引かれてしまったんだろうね。彼らは少しでも自分達に気付ける人間がいれば助けて欲しくなるから」

「・・・なぜ」

説明を終えた絶鬼に刹那は静かに問うた。

それは疑問に答えてほしい訳ではなかったのかもしれない。ただ、その答えが自分の求める物かもしれないと思えてしまった。

「・・・別に、最初はその霊を消して誤魔化しでも除霊したことにするつもりだったさ。だけど・・・」

『ダメ』

「っち、ただ頼まれたんだ。こいつらを助けてやってくれてな」

それは刹那の求めている物ではなかったが、選択肢として覚えておくことにした。

除霊完了・・・とはいかなかったが、問題を解決したことを学園側に報告しに刀子は学園長室にやって来ていた。

今回の一件、全て絶鬼1人に解決してもらったというのは神鳴流として情けない話だが、刀子は全てを話すつもりであった。

「ほう、彼が解決したと」

「はい。彼は元から解決するより退治するつもりだったらしいですが、大河内アキラの頼みにより供養することにしました。

その後、恒久的な解決策とし龍宮神社までの道筋に仮の霊道を作り、解決に至りました。

今後は霊道が安定し、女子寮の霊道が消え去るまで監視するのみとなります。此方は我々神鳴流が担当させて頂きます」

一通りの説明を終えた刀子は笑いながら報告を聞いていた学園長に深々と礼をとった。本来の役目を果たせなかった謝罪と、絶鬼への待遇改善を合わせて。

聞けば、彼はパニックになっていた生徒を落ち着かせたという功績もある。

最初こそ妖怪である彼を西のスパイか侵入者としか見ていなかったが、今回の一件でそれは自分の先入観でしかないと痛感した。そん

な背景もあり、彼が麻帆良に滞在する辺りの事情も含めて彼への周りの態度の改善を頼んだ。

「そうか、そうか。それはまた刹那君にとって良い勉強になったことじゃろうな」

「はい。刹那はあれで剣を振るう事が神鳴流の在り方と勘違いしている節がありますので、彼には大変ありがたい刺激となりました」

「それはまた良い誤算じゃのう。これなら上手くやっていけそうじゃない」

「ですが、周りはまだ彼を疑っています」

「なーに、そんなものはこれからの彼の行動次第じゃて。

良ければ残るのは嫉妬や羨望。悪ければ彼は軋轢に苦しむじやろうな・・・だが、それも杞憂になりそうじゃ」

近衛門が朗らかに笑う姿を見ながら刀子も笑い返した。

「それにしても、大河内アキラ君・・・のう」

「はい。刹那の話によれば彼女の基礎霊力は刹那以上で、それは絶鬼君が保証するという話です」

「それはまた・・・」

「ですが、彼女自体に戦闘力は皆無なため必然的に誰かが守らねばなりません。現在は絶鬼君がその役を自身で果たしています」

「彼女も保護対象・・・難しいのう」

「記憶自体も消却より覚えていた方が何かと都合が良いと思いついて、刹那と私。他に高畑先生の非常用の携帯番号を覚えておきました」

記憶を忘れるということは、平穩に生きる利点があるが助けを求める場所さえ忘れるという欠点もある。特に今回のような魔法関係はこちら側を知らなければ助けも呼べなくなる。ならば忘れないほうが良いに決まっている。

それに、もしかしたら彼女が狙われる可能性もあるのだから。

「いんなもの！」

それは、とある魔法使いが行った暴挙であつた。

絶鬼が自分達の手柄を、いや彼女達の言う役目を奪つたのだ。それは魔法使いのアイデンティティーに似た誇りを傷付けたと同義に近かつた。

年配や、本来の魔法使いならば自分が出来なくても手放して喜ぶ事を昨今の若輩な魔法使いには出来ない。なにせ彼らはそれが出来る事を喜び、そして自分達は特別だと考えるからだ。

そこに責任や、理想はない。あるのは立派な魔法使いを目指すための大儀名分と妄想だけだ。一部とはいえ、数で言えば彼らは多い。

そして……

「きゃーっつ?!」

その行いは全て自分へと還る。

誰かを助けた喜びが、また誰かを助ける楽しみに還るように。誰か

の成功を妬めば、自分への障害に還る。

だがそれさえも絶鬼への怨みにしか変わらないのだった。

「あの、あの妖怪のせいだ！！！」

人間はこうも醜い。

他人の成功を妬み、自身の至らなさを押しつける。

だが、全てが全てそうではない。彼が求める物はそうではない。

ただ、求める物はそういった醜さの中に埋もれているだけなのだから。

1日目 1時限目：通リゃんせの二番目って、意外に恐いね・・・創作だけどや

今回はパソコンが未だに新居のネット環境が駄目なため、前半は省きました。

今週中には前半も入れるつもりです・・・

それでは、今回の霊についてぜつとん先生が補足します。

無縁仏というのは昔からあったわけじゃないんだ。

元々は寺や神社など客の足を遠ざけない為に作った霊が、無縁仏の始まりさ。

なにより、飛鳥時代より以前なら古墳みたいに参拝する人間なんかすぐ途絶える。なのに無縁仏は関係ないのが時代によって産まれた証拠かもね。

当時の宗教は現在より軽んじてはいなかったから、無縁仏のように転生や極楽に行けずに彷徨うことを恐がった。そうすることで参拝客は足を遠ざけず、また小布施もそれなりに儲けていたんだ。

だが、時代の移り変りにより墓など決めずに自然に還るという発想から自然回帰を望む者達が増えていった。

だがそういった埋葬は現代では違法廃棄と言われてしまう。自然の一部でしかない人間が自然に還れず、一定の場所に囚われる・・・救えないよ。

さて、話を戻そうか。

現代では一族の墓などに遺骨を埋めるんだけど、それでも代を重ねればいなくなる。

でも、無縁者が死ねば誰がその遺体を引き取り、供養すると思う。

そういった無縁者は一ヶ所に纏められるんだ。供養だってだいたい一年に一回くらい。まあ、それでも成仏出来ないとなると相当強欲な人間なんだろうね。

ちなみに、無縁仏が唄う通りゃんせは昔の子供達を歌っているんだ。

当時は七歳まで育つ子供は多くなくてね。紙で人型を切り、七歳の祝いに人型を神社に奉納する。

それまで神に護ってもらっていたから、行きはよいよい。それから神に護られないから帰りは恐いってことだね。

今日の補習はここまで。勉強になったね。

一日目 二時現目 『時を駆ける少女・・・その名もH A N A C O!・・・』

ねえ、トイレの花子さんって聞いたことない？

三番目のトイレを三回ノックすると出るっていう・・・

あ、知ってる！呼んだらつれてかれちゃうんだよね？

そう、そのトイレの花子さんなんだけどね・・・実は・・・

（また、浮遊霊だ・・・最近多いかな？）

アキラは最近になって騒がしくなった霊達を気にしながらも絶鬼と約束した待ち合わせ場所に向かう。

原因としては絶鬼の除霊が噂になったこと。また絶鬼に成仏して貰おうと集まったからである。

だが、彼は群がる霊達を無視するか喰らうだけである。そのため間に合わない分や、救われないと分かった者が麻帆良に溢れるのは自然な流れだった。

見えるだけなら神鳴流の使い手達も見えるが、大概は悪霊かそれに落ちかけている者しか見られないため善良・・・なのは判断しかねるが、そういった浮遊霊は力ある場所に集まる。

「お待たせ・・・またゲーム？」

待ち合わせ場所につくとそこには携帯ゲームで暇を潰していた絶鬼がいた。

この前の一件以来、彼はゲームにはまったみたいで、こうして暇があればゲームをしている。遊ぶゲームも最初はちよくちよく借りた物から、今では自分で購入してやると様々だ。

「駄目かい？」

「ダメとは言わないけど、程々にね」

「はいはい」

全くわかっていない。たぶん、明日もこうしてゲームをしているに違いない。

アキラは忠告も聞かない絶鬼に対し諦めに似た溜め池を付くしかなかった。

「今度はなにしてるの？」

「スーパーロボ——」

「うん。わかった」

途中で遮ったのが余程面白くないのか絶鬼君の顔は優れない。でも・・・それ以上言っちゃうと大人な世界に触れちゃう気がするんだ。

「お願いだから超廃人にだけはならないでね」

「努力はするよ」

「ならない努力だよね？」

「・・・」

返事がない。どうやら力付くがお望みらしい。

今日はアキラに頼み麻帆良の案内をしてもらっている。

本来なら3日も滞在しないつもりが、済し崩し的に1週間以上になった。生活用品として使い捨てでは馬鹿にならないのだ。そのために、アキラに案内を頼んだ。

「絶鬼君・・・」

「すみません」

だが、買っているのはゲームばかり。

新古織り交ぜてあらゆるジャンルのゲームを買い漁った結果、買い物袋はパンパンである。その中に生活用品などなく、あるのはゲームのみだ。

「洗面用具と衣類買わないといけないんだよ？」

「金ならある」

「そついう問題じゃないよ」

「・・・すみません」

アキラに引きずられるように僕は順番に店を回る。

何の拘りもない僕の生活用品は一時間もせずに揃い、空いた時間にお茶でもしようとアキラを誘う。

自然な流れだと僕は思う。いくら人間が愚鈍な生き物だろうが、借りは返すべきだ。

だというのに、なぜアキラは一度断ったんだ？

情緒不安定な人間のように急に焦りだし、顔は真っ赤。何か病気なのか？

チェーン店のスターボックスで二人分の珈琲を頼み、席に戻ると見覚えのある少女達がいた。

「ほー、ほー。つまりはデートですか？」

「ち、違うー！」

「でもうちらから見てもラブラブな感じやったえ」

「むはー！義理の兄妹に芽生えた愛・・・筆が進むわー！」

「わわわ！そんな、兄妹でなんて・・・」

「だから誤解だよ！」

「血が繋がらないとはいえ、兄妹での結婚は不可能です。
まあ、一度どちらかが大河内姓を抜ければわかりませんが・・・」

「本当に誤解だって！！！」

・・・他人のふりがいいかな？

離れた席についた僕は先程まで続けていたゲームを続けながら彼女達の様子をチラチラと窺う。ヒートアップするのは構わないが、彼女達には羞恥心が無いのだろうか・・・周りの視線が生暖かったり、白かったり、痛々しい事に気が付かないとは。

まさか！彼女達はそんな視線で見られることが快感なのか？！

・・・成程、ならあの感情の昂ぶり様にも納得できる。流石にアキラもそんな人種だというのは驚きだが、見守るのが家族だとゲームでも言っていたな。

なに、僕は気にしない。存分に溜め込んだストレスを発散――

「ぜっくん・・・」

「・・・・・・」

だから、いつもいつも・・・どうやってあの距離を気配も悟らせずに来た！気配を出して近づいてくれ！最後には僕を驚き殺すつもりか？！

「何で無視するのかな？」

「あ、僕ですか？」

「白々しいよ」

とりあえず、他人のふりだ。

悪いが・・・僕は人間に見られて快感を得る趣味はない！逆に虫酸が走る！

「すいませんが、人違いでは？
オレは高町恭也と申しますので」

「・・・それってシスコンの主人公だよ」

む、それはマズい。火に油じゃないか・・・後ろの奴ら、楽しそうじゃないか。そんなに殺されたいか？

「コードネーム、ヒロ・ユイだ」

「知らなかった。ぜっくんに自虐趣味があつたなんて・・・ダメだよ、授業が終わった後に一々自爆しちゃ」

アリエナイ。誰ガ自爆スルカ。

「いやいや、オレは安藤真希だぜ？」

「・・・ぜっくん、ちょっとお話しようか」

「ま、待てよ！本当に人違いなんだ——」

「大丈夫、ぜっくんなら脱衣婆も余裕だよ。道に迷わなきゃ、ね
迷っても、鬼のぜっくんなら大丈夫。上を目指せば帰ってこれるか
ら」

どうやら今回は殺ル気だ。

「大丈夫なら命の保証を——」

「頭と言わず、魂まで冷やそうか？」

眠鬼、お兄ちゃんは今からそっちに行くよ。

「へえ、じゃあぜっとんって麻帆良に住むんだ」

節々が痛い。

目が、餓えている。

クソが、あの脱衣婆・・・群れて襲いやがって。それになぜあの時は婆しかいなかった！三途の川では精神と年齢は食い違はずなのに・・・アキラや少女達がここまで眼を癒してくれるなんて・・・

「・・・ああ、少々長居したせいで日用品が足りなくて買い足したんだ」

「六割がゲームですが？」

・・・いいじゃん別に。

「本当なら二、三日の滞在が既に二週間も近い。流石にホテルの日用品じゃ足りなくなってきたんだ」

「スルーですか」

黙れ、チビデコ。喰うぞ。

「へー、今はホテル暮らしなの？」

「ああ、ここから二駅先の西麻帆良にあるプラザホテルにいる」

「面白そうね、今度遊びに言ってもいい？」

「来るな」

「いいじゃんぜつとん」

ふざけるなよ。何故僕が人間なんかを部屋に招かねばならない？

いや、それよりもだ・・・

「ぜつとん」

「そのぜつとんというのはなんだ？」

「愛称だよ。」

だってさ、ぜつくんは大河内さん専用だから私達はぜつとんって呼ぼうかなって

「呼ぶな。ふざけるな。気安いぞ」

「まあまあ、それに今までこの私やユエ吉のようなゲーマーに勝つ程の腕前、さらにはあの相手の手を尽く潰す鬼畜さ！まさに、初代ウルトラに出てくるゼットン！！」

それにさ、なーんかぜつとんが使うキャラって黒とか極悪なのが多いし」

腕前・・・鬼畜さ・・・極悪・・・

「さらには！君の頭文字も、Z！」

マジンガー・・・グレート・・・カイザー・・・魔神皇帝・・・影
山さん・・・

「そんな君には、ぜつとんしかない！」

「パル・・・」

「ハルナ・・・」

「ハルナあ、ちと言い過ぎやで」

「大丈夫、絶鬼君？」

力強く言い切るハルナに絶鬼は彼女の言葉を繰り返して呟く。その表情は俯いているためによく分からないが、コーヒーに映りこむ顔はどこか表情の色が落ちてしている。

言われた言葉を噛み締めるように呟き、言葉の真意を汲み取るように反芻する姿はどこか暗い。それはアキラが本気で心配する程に暗かった。

「極悪・・・鬼畜さ・・・終わりを意味するZ・・・誰にも負けな

い強さ・・・」

「・・・なんか様子がおかしいよ、ユエ」

「錯乱してるだけです」

「ハルナあ」

「ダメかな？結構良いと思うんだけど？」

「絶鬼君？」

「ふ、ふふふ・・・」

突如笑いだした絶鬼に対する周りの反応は冷めていた。

だが、それさえ気付いていない絶鬼は噛み殺すように笑い続けた。

「くくく・・・ハハハハハ！」

「絶鬼君・・・」

「絶鬼さんが壊れたよユエ」！

「アハハハハ！そうか、そうかそうか！
決して退かない腕前！

弱者さえ踏み躪る極悪さ！

死人に鞭打つ鬼畜さ！

物事を終わらす意味にあるZ！

成程、成程成程！悪くない、悪くないじゃないか！」

「お、本人公式だ♪」

「中々なセンスだな、女！

気に入った、気に入ったぞその名前！」

この後、立場が逆転した絶鬼とハルナは一時間程アキラ達から無視されることとなった。

荷物を置いた絶鬼は引き摺られるように麻帆良の端にある廃校にや
つて来ていた。

「じつつはさゝ、前々から気になってた噂があるだよね」

「くだらん帰る」

「まあまあ、ぜつとんがいればマジで出て来ても大丈夫だから居て
よ」

「知るか。」

お前達が悪霊や妖怪に喰われようが僕には関係ない」

ゲームをカチカチと音立てながら冷たく突き放す。

「ハルナ、噂って？」

「実はね」

「そうか、無視か・・・喰うぞ餓鬼共」

「まあまあ、落ち着いてや絶鬼君」

「ダメだよ絶鬼君」

「離せ！この餓鬼共、殺してくれる！」

両手をがっしり掴む彼女達を振り回しながら絶鬼は暴れる。

「トイレの花子さんって知ってるでしょ？」

「あの三番目のトイレをノックしたら出てくる幽霊、だよね・・・？」

「はいです。最も根強い学校の怪談の1つですね。
三階の女子トイレ、手前から三番目の個室を手前から同じ手順で三回ノックした際に返事をする幽霊ですね」

夕映の説明にのどかはガクガクと震え、ハルナは満足そうに笑う。

その後ろでは未だにアキラとのがかが乱心する絶鬼を取り押さえていた。

「そう！最も有名で、日本一知名度があるトイレの花子さん！言わば、日本の幽霊代表よー！」

まるでバックで爆発が起きているかのようにハルナは力強く叫ぶ。

「ですがハルナ。その花子さんがどうしたのですか？」

「離せ・・・僕を自由にしろおおおおっ！！！」

「どうどう、落ち着こうな絶鬼君」

「絶鬼君、駄目だよ食べちゃ」

ギヤーギヤーと騒ぐ絶鬼達は少女達の中では完全に消え去っていた。代わりに花子さんへ意識が集中していき。

「花子さんの噂って、実は結構最近に流れはじめたって知ってた？」

噂が本格的に流れ始めたのは今から3、40年程前からである。テレビや電話などが未だに普及仕切っていない昔、噂は完全に人々とのコミュニケーションで広がるしかなかった。

「学校の怪談」は一種の都市伝説であり、地域性の高いその学校固有の話題が口コミやマスコミ等により流布され他の学校にも伝わり、その地域における「アレンジ」を加えられた後、再度他地域に「輸

出」される場合が多い。インターネットの普及によりこの傾向はより顕著となり、「同時多発的流行」となった結果、「元ネタ」が同じであっても「あの学校でも噂になっているから本当の話だ」とますます信憑性を増す事となる。

そのため、噂の広がり 위해서는 人の口を介さなければいけない。それと同時に噂の真偽の判断も人の口でしか情報が集められず、また自分で試すしかない。

だが、人が自分から危険を犯すだろうか？

残念ながら、全てが全てが確かめようとはしない。

故に、嘘の情報さえ当時では真実にさえなる。

そうして出来上がった噂に【学校の怪談】と言うものがある。

閉鎖的で、夜の不気味さ、理科室などにある気味の悪いホルマリン漬けや人体模型のある学校は未だ知識の集まりきっていない子供には恐れを沸かせる。その為、学校での噂は様々なバリエーションを産んでいった。

そうして似た噂は混じり合い、つまらない噂は消え、最後には現在にも伝わる噂になったのだ。

「トイレの花子さんにも色々と尾ビレ羽ビレがついてね。今じゃ兄妹や両親もいる始末なんだよね。」

「はあ、くだらない」

「ucci、ucci、ucci・・・本題はこれからよ。」

焦らすようにハルナは笑みを浮かべた。

「アキラ・・・近衛・・・大丈夫、僕は冷静だ」

「ごめんな。そんな据わった目えされたら信用したくともできんえ。」

「絶鬼君・・・」

「心配するな。僕は到って冷静さ・・・殺す方法は勿論。どこに連れていき、苦しめながら殺し、死体をどう始末するかも考えている」

（心配するな？）

（嫌やわ、全然冷静やないわ）

呆れたユエと怯え始めるのどかに取って置きよ、と言いながらハルナは本題に入る。

「なんと！元祖トイレの花子さん、元麻帆良第三中学校に出るのよ！！！！」

「え、ええええええっ？！」

「ただの噂話です、落ち着いてくださいのどか」

「まったく、これだからバリバリゆとりなユエ吉は。その点、のどかはわかってるよ」

「ハルナ、ゆとりの意味を知ってますか？」

怯えるのどかを空気を読んだりアクションとしか思わないハルナは、彼女に抱きつきながら頬擦りをする。

対する夕映はハルナの行動に呆れを感じさせる溜め息を吐いていた。

「麻帆良ではその手の怪談なら掃いてもありますよ」

「だから確かめるんじゃない！」

意気込むハルナは乗り気ではない2人の背中を押して廃校舎へ向か

う。目的地は三階の女子トイレだ。

「ハ、ハルナ」。絶鬼君がいないよー！」

「あちゃあ、呆れて来なかったのかな？」

「当然の結果です」

既に三階への踊り場に着いての事実は途端にのどかを不安にさせ、ハルナを不安にさせた。平気なのは信じていない夕映ぐらいなものだ。

カツコツ、カツコツ、カツコツと響く足音と心音が特大のスピーカーど大きくしてるのでは？、と疑いたくなる程に廃校舎は静かだ。

長年人の手入れはおろか、誰も来なかったために厚い埃の層が踏み締めた足の周りを舞い、夕焼けに照らされた極細の埃がキラキラと光る。

気味が悪い。

静かだ。

誰かに見られているような。

「気味が悪い」

「ただの廃墟ですのどか」

「廃墟・・・女の子が3人・・・助けにくるヒーロー！」

「漫画の描きすぎです。頭のネジも二次元になったのですか？」

「ヒドス（o DO:）」

ハルナ達が廃校舎に入った後、絶鬼達は校庭で錆付いたブランコを揺らしていた。

心配するアキラとこのかと違い、絶鬼は暇潰しにとゲームで遊んで

いた。

「なあなあ」

「・・・」

「廃校舎に幽霊が出るって本当なん？」

「・・・」

話し掛けるこのかを無視し、絶鬼はただボタンを押す。まるでボタンの上下運動が会話の一部のようだとはこのかは冗談混じりに考えてしまう。

アキラに小突かれるまで問答は続き、まともな会話になったときの彼の顔はかなり不機嫌さを表していた。

「知らないよ。それに何か遭っても、彼女達の自業自得さ」

「そやけど」

「本来、死者と生者は関わるべきじゃないんだ。だというのに、彼女達は興味本位で関わろうとする。それはね、他人の家に土足で入るのと何も変わらないんだ」

「どうということなん？」

「死者を供養する。悪霊を退治する。霊の話を聞く。これらはまず相手を考えた上で呼び掛け、そしてそれにあった対応を取る。」

「ただ、彼女達はただ興味本位で霊の領域に入った。力や知識が無いにも関わらず」

霊には霊の領域がある。

本来なら両者は互いを認識出来ることはない。

だが、時折相手を認識する者がいる。

生前に恨み、悔やみ、やり残しなど強い想いがあつた者は死後もそれを果たそうと生者を見ようとする。

生者は彼らと違い、見る必要も知る必要もない。だが先天的にそういった力が強い者がいる。

霊能力者。彼方らの者達を見れ、触れ、話す事が出来る者達。例を上げるとするなら、大河内アキラや桜咲刹那・・・知っている者なら鶴野鳴助や無限界時空が強力な力を持っている。

前者なら彼らを認識するしか出来ない。だが後者なら彼らから身を守る術がある。

面白半分で霊能力を使用すれば、命さえないのである。

例外といえば絶鬼のような妖怪くらいな者だろう。

「霊とて擬似的な感情はある。だから用事もなく来たものには怒り、供養のために来てくれた者には感謝するんだ」

「やったらハルナ達が・・・」

「花子とやらがどういった霊かは知らないが・・・問題ないさ」

「はえ？」

「【人命に関わるような噂】は普通広まらない。広まるのは【ただの噂】でしかない」

「そうなら安心したわ」

和やかな笑みで絶鬼に感謝するこのかを見てアキラは彼を小突く。

（一応、少ししたら見に行つてちょうだい）

（何故？）

（危険だから。あんな場所、霊が集まらないわけないよ・・・）

（嫌（お話）——わかりました）

急に満足気に笑ったアキラと不貞腐れた絶鬼を不思議に思いながらこのかはアキラと料理について話を弾ませた。

そして、話が一番の山に差し掛かった時だ。廃校舎から悲鳴が聞こえた。

悲鳴が聞こえてから数分。廃校舎からハルナ達が駆け出てきた。

気絶したのどかを背負いながらにしては素早い彼女達を見ると、どうやら中で余程の事が起こったらしい。

「ぜつと～～～ん！！！」

突然飛び付いてきたと思ったら今度は頭をシェイクされる絶鬼。その腕は殴り飛ばそうとしたためかアキラに拘束されている。

「五月蠅い」

「出た！本当に出た！」

「喧しい」

「ダメ」

殴る事が許されないならと冷たく接する彼を無視してハルナは叫び続ける。

それでも我慢できなかったのか無理矢理殴り剥がそうとするが、逆の腕も拘束された。

「暴力はいかんえ」

「花子さん、花子が実在したのよー！」

「死ねばいいのに」

「真面目に聞けえ！」

「アミバ！」

真面目に聞こうとしない彼に我慢の限界が来たハルナが彼を殴った。

「何故僕はダメで彼女は許した?!」

「平気でしょ?」

「精神的に苦痛だ!」

「男の子なら我慢や」

「男女差別じゃないか?!」

真に男女平等を謳うなら、暴力とて平等のはずだ!

いいかい、真の男女平等というのは自分達が男より劣っているという女の被害妄想でしかないんだ!男はいいのに、男だけ認められる男ばかり威張っている・・・それはね、単に生物上男は丈夫にできているだけなんだよ!

それなのに、男は女を殴るべきじゃない。男が家事や炊事が好きなんて女々しいというのは自分から男女平等を否定――」

「話を聞けえ!」

「ひでぶ?!」

自分を無視しながら口論する絶鬼に対しハルナは彼を蹴とばす。その顔には全くの罪悪感を感じず、夕映だけは彼の考えを心の中だけで賛成した。口には出さないのは、単に場の空気を読んだに過ぎない。

それに、流石に彼を可哀想と思ったアキラとこのかがブランコに頭を打ち付けている彼に声をかけている。

（・・・殺したい・・・何故、殺してはダメなんだ・・・理不尽だ！！！）

「マジで出たのよ！元祖花子さんが！」

それは、彼女達が件のトイレに着いたときから始まる。

怯えるのどかを励ましながらやってきた彼女達にはそこまで深刻な恐怖はなかった。ただの好奇心と、知的欲求。さらには沸き上がる妄想に恐怖しているだけで、誰も真に恐怖しているものなどいない。

「それじゃあ、入るよ・・・」

ハルナが雰囲気を出すためにわざと小さな声で合図するが、その声にも若干抑えきれなかった笑いが含まれている。

ギイ・・・と軋む蝶番を無視して開けられたトイレは埃こそ積もっているが、比較的綺麗な方であった。ただ、綺麗と言うが中はあちこちに先客達の落書きや破壊跡があることを無視したらの話だ。普通の廃墟と比べたら綺麗でも、一般的な学校に比べれば十分に汚い。

女子トイレは一番奥に窓があり、そこから3つの個室と用具入れが入り口のすぐ横にあり反対側には鏡と手洗い場が3つ並んでいた。

「噂では三つ目のトイレを三回ノックし、それを三回で花子さんが出るのでしたね？」

「そうよん」

「やっぱやめよーよー」

「なーに言ってるのよのどか。ここまで来たら最後まで！」

「ノリノリですね、ハルナ」

彼女達に危機感なんてなかった。

ただ楽しいから、ただ面白そうだから、ただスリリングだから・・・
愚かしい。それが絶鬼が考えたことだ。

人間なんて自然の延長でしかない。いや、延長でしかなかった。

人間が天地に立ち向かえるか？

馬鹿馬鹿しい。

人間が現代の建築技術で地震に、嵐に、火災に立ち向かえるか？対策でなく、立ち向かえるか？

時が経つにつれ、代を重ねるにつれ人間は傲慢になった。愚かしか言いようがない・・・彼女達の話の聞けばよく分かる。

「だってさ、元祖だよ元祖」

彼女達は積もる埃を舞わせ、小さなゴミを踏みつけて塗装の剥がれた扉の前に立つ。

夕焼けが差し込むトイレ鏡に反射する光で目を細めねばならず、窓際に立つといっそう細くしてしまう。

窓際に来て分かるが、背の高い木が見えた。なんの木か分からないが、青々とした葉が夕日に反射する姿を夕映は違う場所で見ただった。

「それじゃいくよ・・・」

コン、コン、コン・・・

ゆっくりとしたノックがトイレ内に響く。

しかし、何も起きない。

コン、コン、コン・・・

二回目。

返事はおろか変化も感じられない。ただ夕日が少しずつ傾いていくだけだ。

そして・・・

『なにか、用かしらあ？』

三回目のノックは叶わなかった。

甘い声。まるで子供をあやすような綺麗な女性の声が響いたのだ。

「それで、声がした方を向くとね・・・いるのよ。どう考えても人がいられるような場所じゃないのに」

ハルナは思い出したのか身震いするように体を震わせた。体を抱かなければ今すぐにでもカタカタ、カタカタと震え続ける自分を安心させるかのように。

「窓に、女の子が・・・ちょうど私達より少し上の女の子が逆さまになりながら窓から見てたの・・・」

怪談としては中々としか言えない話も、実体験となると話が変わる。まずリアリティーが増し、さらに幽霊という不可解な存在が自分達の前にも現われるのでは、という妄想が恐怖を増長させる。

既にこのかは怯えてさえいる。

だが、アキラと絶鬼は違う。2人にとって霊など馴れ親しんだ存在見ようと思えば見つけられるし、触ろうと思えば触れられる。なにせ片方は除霊専門だからだ。

そんな2人からすれば、怯えるより先に考える。その霊が悪霊か自縛霊か。または悪影響は、除霊の必要は、はたまた成仏させるには。

それがアキラの中で巡る考えなのに対し、絶鬼は違う。面倒だ、帰りたい、だから来なくなかった、自業自得じゃないか。はつきり言っただけの火事を決め込んでいた。

「助けてよぜつとん！」

「面倒」

コンマ数秒の世界からの拒否だった。

断られたハルナも早過ぎる解答を反芻し、理解する頃には涙を目に浮かべる。

「鬼！鬼畜！外道！人でなし！チビ！」

「何を今さら・・・あとお前にチビ言われたくない。アキラが無駄にデカいだけだ」

「デカイ・・・無駄に?!」

「こんな美少女が助けを求めているのに、手を差し伸べる事はおろかフラグさえ築かないなんて・・・それでも男?! 実についてないんじゃないの!」

「ハルナ、下品です」

「それにフラグなんて立つとはおもえんわ」

「私が・・・無駄に・・・?」

馬鹿らしい、と絶鬼が帰ろうとするがその肩を掴む者がいた。思いの外に強く捕まれたために絶鬼は短く悲鳴を上げて振り向いた。そ

して、後悔する。

「じっくり、お話しようか・・・久々に兄妹水入らずで」

「アダダダダ！」

ギリギリと食い込む指をパンパン叩きながら涙ながらに抵抗するが、指の力は緩むどころかさらに深く食い込む。しかも、引き摺られる絶鬼は肩を支店に引き摺られる為に痛みは倍増するばかりだ。

一時間弱だろうか？アキラと絶鬼が揃って廃校舎から出てきた。

アキラは気難しい顔をしており、絶鬼はあちこちの青痣を見え隠れさせながら4人の前に戻ってきた。

4人から除霊結果を聞くとアキラは笑いながら大丈夫、と言帰してその場は解散となった。だが帰り際はその話題で持ちきりとなり、ハルナはマンガに使うと言ってアキラを困らせ、夕映は花子さんを科学的根拠から様々な推論や考察をする。

アキラはそれらを必死に笑って宥めながら女子寮へと帰ったが、彼女は4人と別れた後に密かに電話をかけていた。

「もしもし、高畑先生ですか？大河内です・・・」

ここ最近、花子さんの話は学園中で持ちきりとなった。実際に目撃した人物が面白半分に話し、それを是非記事にと食い付いた新聞部が発端だ。それがクラスメートだということが悲しいが、人の口に戸は建てられないということなんだろう。

彼女達は一躍時の人のような扱いを受けるが、同時にアキラはその事実には眉を顰め続けていた。

何故、そこまで彼らを面白可笑しく話せるのかと。知りもせず好き勝手噂された話の中には笑い話のようなものから、悲惨な内容と多岐に渡るが・・・そのどれもこれもが心ない人が広めたのだと彼女は信じたかった。

悪口は、嫌い。人を傷つけるから・・・だから噂話も好きじゃない。

この1週間、アキラは気分が悪かった。記事にするからと言って笑顔でICレコーダーを向けるクラスメートの願いを断った時も悪かったが、噂話を聞いたときは最悪としか言いようがなかった。

「大河内君・・・」

「はい？」

「顔色が悪いが、大丈夫かい？」

どうやら、隠し通せるレベルを通り過ぎたみたい。担任の高畑先生は心配そうだ。

「・・・正直、ここ1週間は最悪な気分です」

「そうかい」

仕方ないとはいえ、気分が優れないまま1週間も過ごすと顔色にも出る。さらに悪い事に最近はタイムが悪く、絶不調並みだ。

最悪だ。

「それよりも、見つかりましたか？」

「ああ、見つかったよ」

「本当ですか?!」

「ああ。しかも運が言いことにまだ御存命だ」

吉報、と言つべきなのかな？

——とりあえず、私は頼んでいた探し人が見つかった事を聞いて気分が若干良くなり、さらに生きていると聞いたときには最高の気分になった。

「流石に呼ぶ口実が口実だから悩んでるが、調べたら良い事がわかったよ」

「え、いつたい・・・」

「実はね、その方は――」

「嘘・・・でも、確かに――」

「は・・・っ、ちよ、ちよっど待ってよお母さん」

その日、少女はいつものように疲れ切った顔で部屋に帰ってくると
久々に実家から電話が掛かってきた。

いったい何事かと電話に出てみると自分を心配し、励ます母の言葉
に少女は暖かみを感じた。

自分の中にある現実と、目の前にある現実においてストレスを蓄め
ていた彼女にとって現実味ある母の言葉は身に染みる。

椅子に腰掛け、PCの電源を入れながらも少女は母の言葉を聞き漏
らすことはなかった。

「大丈夫だよ、お母さん……確かに疲れることも多いけど楽しく
やってるから」

これは嘘だ。本当は辛い……辛くて、辛くて泣き叫びたい時があ
る。

「うん、うん……。あはは、友達がいるから、大丈夫だから心配
することないよ」

友達なんかいない。いつからか、周りと自分の温度差に気が付いた

ときには友達なんかいなかった。

確かに、今のクラスの連中はすぐに誰とでも友達になれると思う。だけど私が受け付けられない。あんな連中・・・どうしても受け付けられない。

朱に交わればなんとやら。アイツらといれば、私の何かが崩れそうで嫌なんだ・・・生理的に、本能的に無理なんだよ！

「え？最近・・・ねえ。

そうだ、この前はね——」

いったい何回かもわかんないや。こうやって平気で嘘つくのも・・・今では自慢にもなりやしないけど女優顔負けの演技だと思う。

鏡に写る自分は、なんて安っぽい笑顔を浮かべてるんだろ・・・正直気持ち悪い。

それに比べてクラスメートは卑怯だ！なんであそこまで綺麗所が揃うんだ？！ありえないだろう、普通！私への当て付けかつての！

「え・・・お願い？」

クソ！確かにニキビとか、肌荒れが最近気になるけど・・・私だって化粧したりすればな！

「お婆ちゃんを？」

え、でもなんでまた急に・・・電話があつたってどこから？」

せめて私もあんなふうに笑えればな・・・バカになればな・・・無理か。

「はあ?! 私に案内?!」

いや、待ってよお母——いや、確かに休みだけど・・・ってちょっと待てコラ！」

そして冒頭に戻る。

私は、今週の日曜にお婆ちゃんと一緒に麻帆良を案内するという約束をこじつけられたのだ。

週末の日曜は最高に晴れやかだったコンチクショー……。いや、曇りとかだったら鬱だから引き籠もるだけだから気にしない——晴れた日も引き籠もってなんかいいからな。

「ごめんねえ、ちうちゃん」

「気にしないでいいよお婆ちゃん」

読者の方々すいません。私、嘘をついてしまいました！

本当は、休日じゃネットかブログの更新以外やることはありません！

しかも最近じゃ着物姿に手間取って更新が亀です。さらにサーセン
wwww

「あらあら、そんなもつたいない。ちうちゃんは美人さんなんだから外に出なきや。」

「なんたってちうちゃんは——」

「お婆ちゃんのお姉ちゃんに似てるんでしょ？
でもさ、写真を見る限り……。その、私より美人だ」

昔からお婆ちゃんは私を自分の姉の生まれ変わりみたいに言うが、

正直写真を見せてもらったらそんなのありえないと思った。むしろ今では厭味かと邪推しちまう。

セピア色の写真に写る家族写真。幼い頃のお婆ちゃんの隣に、その人は写っていた。

腰まで伸ばした髪は嫉妬するぐらいに艶やかで柔らかそうだった。顔も整っていて、美人という言葉がとても似合う人だ。

確かに、私に似ているといわれれば似ているかもしれないが・・・

「家族なんだし、遺伝だよ。私はあんなに綺麗じゃないって」

所詮、似ているといっても遺伝でしかない。私がああなるなんてありえない。

なにより私には父方の血もあるし、手先の器用さは父親譲りだ・・・
・そういえばこの前はお母さんにガンブラ捨てられたから電話してきたんだっけ。あれは本気で涙声だったな・・・まあMGのザク4つとシアアザクだしな。

「誰だって最初は醜いアヒルの子さ。

でも、辛い日も苦しい日も越えたから醜いアヒルの子は白鳥になれたんだよ・・・諦めるにしちゃアンタは若すぎるよ」

朗らかに笑うお婆ちゃんに向けていつもの笑顔を浮かべながら、裏

ではそんなの楽観的で希望的観測だと吐き捨てていた。

私だってバカじゃない。私が認められるのは所詮【ちう】であって千雨じゃない。期待して裏切られるなら、期待しない方が賢いんだ。

「ふふふ、信じてないね？」

でも大丈夫さ。お姉ちゃんだって最初はちうちゃんみたいだったんだから・・・賭けてもいいよ。ちうちゃんは絶対綺麗になる」

「お婆ちゃん。賭けるのは――」

「絶対に勝てると解っていたときだけ・・・なら私は勝てるよ」

「お婆ちゃんには適わないな・・・負けたときにどうするか考えなきゃ」

「ふふ、なら・・・そうだねえ。いい彼氏でも作って幸せそうな笑顔を見せる、でどうだい？」

「なんていう無茶を・・・とうとうボケた？」

「ふふふ。負けたら潔くなりなよ、ちうちゃんは少し臆病過ぎなんだから」

杖付きながら歩くお婆ちゃんを見ながらつくづく思う。

（お見通し、か・・・）

「なんで大河内さんがここに・・・」

「こんにちは、長谷川さん」

クラスメートの大河内アキラが待ち合わせ場所にいた。

何故、どうしても考えても答えは出ないままだった。私はてっきりお婆ちゃんの知り合いが来るものと・・・

「あらあら御丁寧にどうも」

「いえ、遠路遙々起こしただいたのですから当然です」

「どういうこと、大河内さん？」

「ここからは私が案内するの。逢わせたい人は違う場所にいるから」

大河内はお婆ちゃんの横に歩いて手を貸しながら答えた。だが、こういった場合にはその逢わせる人物を連れてくるのが常識じゃ……

「逢わせたい人は、そこを離れられないの」

そんなの言い訳じゃねーか！

お婆ちゃんだってもう歳だったのに……

「場所はずぐ近くだから大丈夫」

予定通り、とまではいかなかったけど廃校舎は人払いがしっかり張られていた。人体に害はないらしいけど、噂で持ちきりの場所に誰もいないのだとわかると怖い。

「ここって・・・噂の」

「そう、あんまり好きな呼び方じゃないけど・・・元祖トイレの花子さん^がでる廃校舎」

この前来たばかりだというのに、廃校舎のグラウンドは踏み荒らされていた。小さなゴミも確実に増えている。

校舎だって壊れていなかった場所が壊れていたり、入り口にはしっ

かりと立ち入り禁止の立て看板がある。それでも面白半分に入る人がいるなんて、信じられないし信じたくない。

「はいはい、呼んだかいアキラちゃん？」

「いや、お婆ちゃんは呼んでないから」

「でも確かに『花子』と・・・」

前を歩く私に綺麗な笑顔を浮かべるお婆さんに長谷川はツツコミを入れ、お婆さんはあらあらと笑う。仲が良いと取れる光景だ。

（どういことですか大河内さん？）

（長谷川さんのお婆さん、長谷川花子さんとトイレの花子さんを逢わせるって言ったら信じてくれる？）

（何を馬鹿な・・・あれは噂じゃ——）

「お待たせ、絶鬼君」

柿の木に寄り掛かりながらゲームをしている。彼を見た長谷川さんは変に警戒を شدした。

「あらまあ、懐かしいこと」

「知ってるの、お婆ちゃん？」

「ちうちゃんにはまだ話してなかったね……。ここは私が小学生の頃、お姉ちゃんといつも待ち合わせしていた場所なんだよ」

「花子さん。今日呼んだのは他にもありません……。60年前の約束を果たすためです」

アキラは絶鬼に目配せをする。

「なんでアキラちゃんが……」

「聞いたんです。貴女のお姉さん、長谷川秋葉さんから」

昔、今から60年も前のこと。長谷川花子という少女がいた。

どこにでもいる快活な少女は大好きな姉がいた。それが長谷川秋葉という少女だ。

彼女達は仲が良く、また2人はよく老人の集まりに交わっては笑いあう。よく笑い、素直で、魅力ある姉妹は麻帆良ではとても愛されていた。

そんな2人がいつも待ち合わせしていたのが、柿の木の下。旧麻帆良小学校の横に植えられた大きな柿の木だ。

今でこそ枯れてしまい葉もつかないが、昔は青々としていて四季折々で様々な表情を見せていた。

春には青い葉の下で姉妹を待ちながら花の香りを楽しみ、暖かな風に目を細めながら互いの話をしていた。

夏には暑い日差しを避けるために木陰で涼み、グラウンドで走り回る級友を眺めながら水泳の後で髪が濡れた姉に対しズルいと頬を膨らませていたものだ。

秋には甘い実をつけた柿を姉にせがんでもいで来てもらい、帰り道で笑い合いながら食べていた。あの甘さと、姉の仕方ないという優しい笑顔は今でも忘れない。

冬には様々な雪像を作りながら待ち、やってきた姉に見せてははしゃいでいた。たまに雪合戦に似たじゃれ合いに似た喧嘩もあったけど、楽しかった・・・本当に。

傲慢の・・・姉だった。世界で一番の、私だけの優しく綺麗で姉だった。

トイレの窓から見下ろしては姉が来るのを待っていた。

いつも夕日が差し込むトイレに来ては柿の木を見下ろしていた。

「でも、あの日でそんな幸せも終わった・・・世の中に永遠なんてないんだ。始まりがあるから終わりがあり、私は特別終わりが早かっただけさ」

永久にその幸せが続くと、幼い私は信じていた。

中学にあがり、新たな生活を姉に話ながら毎日を過ごす。

——信じていた。

高校へ入り、初めて出来た彼氏の自慢話をしてはからかわれる。

——疑いはなかった。

社会に出る前に姉の結婚を祝い、姉にも私の晴れ姿を見せたかった。

——ずっとこのまま・・・

だけど、その日は姉が来なかった。ちょうど数年に一度の大きな台風がやってきた日だった。

「アタシはガタガタと立て付けの悪そうな窓からずっと柿の木を見下ろしていたんだ。遅くなってお姉ちゃんがもしかしたらと思ってね……。」

級友が帰り、下校時間を過ぎてもずっと……ずっとね」

迎えに来てはくれなかった。いや、迎えになんかこれなかったんだ。

姉はその日、台風で往生しているご老人達に果物を運んだ帰りだった。

強い雨風に逆らいながら、雨ガッパを着こんで私を迎えに来てくれていた……

「事故だったんだよ……仕方がなかったのさ」

姉は車に轢かれた。当時の兵隊さんの車に姉は轢れちまったんだ。

当時の車なんか今に比べたら劣悪な物で、視界だって満足じゃないのは理解出来る。……けど、当日の私には納得しろというのは余りに酷過ぎた。

土下座をする兵隊さんと、生きているかのような姉の前で私は泣いた。泣いて、泣いて、泣いて、泣き明かした。それでも足りないとはかりに私はずっと姉の隣に居続けたんだ。

哀しかった。理不尽過ぎた。

でも、運命だったんだ・・・

「その日以来、私は柿の木を見下ろし続けていた。もしかしたら姉が来てくれるかも、ってね・・・」

「お婆ちゃん」

「中学校にあがった頃からは、私は柿の木に寄り付かなくなった。賢くなり過ぎたんだね・・・だから思い出の中の姉が怖くて、私は近づかなくなった。」

思えば、あの時からこの木はなーんにも変わってないねえ。こんな老いばれになつて来れるようになるなんて、ちうちゃんのこと言つてられなかったよ」

お婆さんは泣いていた。

それが一体何の感情故かはわからない。

悲しいのかもしれない。

情けないからかもしれない。

嬉しいからかもしれない。

「でも、いったい誰をアタシに逢わせたいんだい？」

「長谷川秋葉さん、貴女のお姉さんです」

「だけどお姉ちゃんは・・・」

「死んでいます。ですが、死んだからといって成仏しているわけじゃありません」

「大河内・・・いい加減にしるよ・・・」

なんのつもりでお婆ちゃんを呼び出したのか知らないが、まさか過去の辛い思い出をぶり返すためだったなんて・・・

（お前だけはまともな奴だと思ってたのに）

クラスでも一歩引いた距離でアイツらと笑い合うコイツは良い奴だと思ってた。

嘘がキライだから嘘は言わない。悪口だってそうだと言っていた。

だつてのに・・・

（コイツも、同じだった）

裏切られたなんて思っていない。元から信じていないのだから。それでも、失望してしまう。

「最低だよ、大河内……」

お婆ちゃんの手をつかみ、帰り道に向かおうとするのを大河内が止めた。

「待つて、本当に逢ってもらいたいの」

「長谷川秋葉は60年も前に死んでるんだ！死人が生き返るわけもないし、どうやって逢わせる気だ！

いいからそこをどけ。私達は帰るんだ！」

大河内の胸ぐらを掴んでどかそうとするが、私の腕力ではビクともしない。流石にスポーツ万能に私なんかが太刀打ち出来るわけがないか……。鍛える気なんか全くないけど。

「駄目。この気を逃したら、きっと2人とも後悔する」

「わかんねー奴だな」

掴まれていた手を振り払い、真正面から睨む。正論を言われる人間にしては真っ直ぐで、力強い目だ。

「死人に口なんかない！話したくても、伝えたくても伝えられないから人は泣くんだよ！

それをお前は否定するのか、なあ！お前はお婆ちゃんの悲しみを否定するってのか。お前に何の権利があつてそんなことするんだよ！」

誰だつて泣く権利はある。そんなことに誰かの許可なんかいらない。逆に、誰にもそれを否定する権利なんかないんだ。

だつてのに、コイツは・・・！

「予定が崩れるなら僕は帰るよ」

「待つて！絶鬼君！」

「絶鬼・・・」

絶鬼と言えば、あの女子寮の幽霊騒動を終わらせたっていう大河内の兄貴か？

・・・無茶苦茶イケメンじゃねーか？！

「長谷川さん。お願い、今だけは信じて！」

「馬鹿らしい。死人に逢えるわけないだろうが・・・現実を見るよ現実を」

「確かに、幽霊なんか普通いないな。妖怪や超能力なんかお伽話の創作だ」

「見ろよ。お前の兄貴だつて——」

「君が、君のような人間にとってそれは紛れもない現実さ。個々が持つ、アイデンティティーを形成する1つだ」

「なにが言いたい？」

私の現実が、私だけの現実だと？

私の現実は、私のアイデンティティーを形成する1つだと？

「君にとって、幽霊や妖怪や超能力はありえない。それは間違いじゃないさ・・・だけどね。確かにそれらは存在するとしたら？」

「馬鹿らしい！これ以上付き合つてられるか！」

「幽霊はいるさ。妖怪も超能力もある・・・ただ君のように眼を瞑り、耳を塞いだ目の前の事象を認めない人間には認知できないだけだ」

「なんだと・・・」

「なに、君が特別じゃない。人間なんて愚かで傲慢な生き物さ。だから君はしっかりと人間をしている」

「喧嘩売ってんのか？」

演技掛かった動作で近づくと絶鬼を睨む。まるで小馬鹿にしたかのようには笑みを浮かべる顔は、今すぐに殴り飛ばしたい衝動になる。

「そんな君のアイデンティティーが壊れてしまう様は、きっと美しいんだろうな・・・。メロディー（悲鳴）はどれだけ美しいんだろうな・・・」

「いい加減にし——」

「さあ、君のメロディーを聞かせてくれよ！」

目を疑った。そいつの手が人間の手から、鬼のように巨大で鋭利な爪を生やす手に変わる様に。

疑問を口にするより、体が逃げようとするより、その鬼の手はずっと早く私を掴み出していた。

『なんだ・・・こりゃあ?!』

頭を捕まれる形で引つ張られた私は、私を見ていた。

意味がわからない。なんで私がそこに？！

『っーか！なんで私は裸なんだあ？！』

産まれた時の姿とかなんとかオブラートに包む必要があるか？裸は裸なんだよ・・・スッポンポンなんだよ？！

「アハハハハ！中々に良いメロディーじゃないか！」

『笑っんじゃねーこの変態野郎！』

「おいおい、確かに引き出したのは僕だが、それから後は本人のイメージさ。つまり君のイメージが足りないから裸なんだあつて・・・いや、もしかしたら君はただの露出——アダモ？！」

「絶鬼君、最低」

スポーツ万能のストレートは、小柄とはいえ絶鬼にトリプルアクセルを決めるくらいの威力を持っていた。

『大河内！なんだよこれ？！』

とりあえず大事な場所を隠しながら悲鳴に似た声を上げる。

「落ち着いて、霊体になっただけだから」

『霊体?!』

「霊体の時は自分イメージが強く影響するの。だから普段の自分を思い出して」

『普段って、いきなり・・・普段・・・普段の私・・・』

突然の事でテンパってたせいだろう。私は、一生涯の恥を味わう事になった。

「・・・」

「・・・」

「あらあら、ちうちゃんはいつたいどうしたんだい？」

お婆ちゃんは見えないから別として、大河内と絶鬼は微妙な視線を向けてきた。普段の私はそこまで微妙なのかと見下ろすと、そこには着慣れたバニースーツがあった。

「つまり、またお姉ちゃんに逢えるのかい？」

「はい。ですからお婆さんは当時の自分を思い出してください」

「・・・」

『見られた・・・見られた・・・見られた』

これからの事を話し合う私とアキラちゃん。

殴られたせいで気絶した絶鬼君。

見えないが、ちうちゃんは落ち込んでいるらしい。

「じゃあ、お願い」

無理矢理立たされた絶鬼君は二度三度叩かれてから意識を取り戻し、鬼の手で私の優待を引き摺りだした。

自分の体を見れば、体は当時の——小学五年の頃の私の手があった。服も、靴も、視線の高さも懐かしい。

『お、お婆ちゃん？』

『あらまあ、綺麗だよちゅちゃん』

『……言わないで』

顔を真つ赤にしながらちゅちゃんは元の私服の姿に戻る。美人さんだったのに勿体ない。

『ハナ？』

『この声は……』

懐かしい声。

優しい声。

温かい声。

そんな声は、私の頭上から聞こえてきた。

『ハナ！』

柿の木の枝に腰掛けていたお姉ちゃんは、そのまま飛び降りると私に抱きついてきた。

温かい。

金木犀の匂い。

全てが、60年という時間に埋もれていたというのに懐かしい。

姉だ。あれだけ逢いたかった、あれだけ求めていた姉だ。

『お姉ちゃん・・・お姉ちゃん？』

懐かしい。本当に懐かしい。

もう逢えないと思ってたのに。逢えないから忘れる事でしか耐えられなかったのに。

『ごめんね。お姉ちゃん、60年も遅れちゃった……』

『お姉ちゃん、お姉ちゃん!』

『ごめんね、本当にごめんね』

何か言わないといけないのに、誤る必要なんかないよ、大丈夫だよ、
と言えれば良いのに……言葉が出て来ない。

『お姉ちゃん、お爺ちゃん達を安心させたかったんだ。だからハナ
より先に向かったの』

『うん』

『ダメなお姉ちゃんだよ。いつつハナには横断歩道は守るよう
に言ってたのに、破ったから死んじゃった』

『うん、うん!』

『少しでも早くハナを迎えに行こうとしたら、60年も遅れちゃっ
たよ……』

泣きながらハナを抱き締めてくれる姉の胸に顔を擦り付ける。これ
が本当に最後の別れなんだと思うと、一秒でも長くこの温もりにし
がみついていたかった。

全部、わかってた。そんなこと60年もあれば十分過ぎた。

お姉ちゃんは優しいからお爺ちゃん達を先にしたのも、新鮮な果物を食べてもらいたいんだって考えたのも。

お姉ちゃんはハナを好きでいてくれたから急いでいたんだって、だから車にひかれちゃったのもわかってた。

どちらもなければ、それはきっと私が大好きなお姉ちゃんじゃない。どっちもあつたから死んじゃった、別れちゃったけど、それでもハナはお姉ちゃんが大好きだ。

『ごめんね。こんなお姉ちゃんで、本当に』

『大好きだもん！』

『ハナ・・・』

『お姉ちゃんは優しいから、お爺ちゃん達を無視できなかったんでしょ？お姉ちゃんは私が好きだから、横断歩道を飛び出しちゃったんでしょ？』

ハナの言葉を聞いてくれるお姉ちゃんの顔はクシャクシになっていく。私を見つめる優しいお目々からは涙が流れ続けている。

それでも、口だけは笑ってた。私の言葉をしっかりと聞いてるんだよ、という風に笑っていてくれる。

『それに、それにね！お姉ちゃんは責任感が強いもん。絶対に約束は破らないもん！だから待っててくれた！』

私を抱き締めていてくれる姉の顔が近づいた。

『中学に上がっても、高校に上がっても』

お姉ちゃんの顔がさらに近づく。お姉ちゃんを抱き締める手がさらにお姉ちゃんを抱き締められる。

『私が社会に出て不安がっても』

声が変わっていた。幼くて、高い声が落ち着きある声になっていた。

『私が結婚して、幸せを噛み締めてる間にも』

抱き締める力を強める。

いつの間にか、抱き締められていた私は逆にお姉ちゃんを抱き締めている。

『お姉ちゃんは待っていてくれたんだね・・・』

『ハナ』

『私の方こそごめんなさいね・・・こんな皺々のお婆ちゃんになるまで約束を忘れていて』

抱き合う私達は互いの温もりを自分の記憶に刻み込む。もう、お別れが近い・・・

『綺麗になつたね、ハナ』

『ありがとうお姉ちゃん・・・』

『お婆ちゃん』

私達は泣いていた。

涙でクシャクシの顔で笑い逢う。無理矢理の笑顔ではなく、互いに認めあった別れとして満面の笑みを浮かべる。

『さようなら、お姉ちゃん。約束を守ってくれてありがとう』

『ハナも元気でね。来てくれたこと、本当に嬉しかったよ』

「大河内・・・なんなんだったんだアレ？」

「トイレの花子さんって呼ばれていた霊だよ」

まだ意識が戻らないお婆ちゃんを抱きながら聞く。

聞けば生氣とかいう、ようは体力みたいな物を使い過ぎただけで命に別状はないらしい。

「だけど名前は・・・」

「トイレの花子っていうのはね、元々幽霊につけた名前じゃないの。あれは貴女のお婆ちゃんを呼称する・・・悪口みたいな物だよ」

「でも日本中の学校に出没しているじゃないか」

トイレの花子さんと言えば日本の幽霊で一番の知名度だ。

「それはただの浮遊霊なだけ。元はね、『柿の上の花子の姉』なんだよ」

「・・・最後に、教えてくれないか。秋葉さんは成仏したんだよね」

お婆ちゃん達が別れをかわした後、私は無理矢理体に押しこめられたためにどうなったかはわからない。だが約束を果たせたのだから・・・成仏するのが筋つてもんだ。

「・・・」

「おい、まさか!」

「聞かない方がいいよ」

「成仏なんか出来ないさ」

「絶鬼君！」

私達の横から絶鬼が割り込む。暇潰しにゲームをしていたはずだが、飽きたようだ。

「どういうことだよ。未練はもうなくなったら普通……」

「君達のせいさ……詳しく言うなら君達人間だけだね」

「説明、してくれ」

「念縛霊って奴さ。自縛霊とは対象の性質さ。

自縛霊は自らの強い後悔や恨みによりその地に縛り付けられる霊。これはポピュラーだね。

だけど、念縛霊は違う。念縛霊は他者の念が集まったせいで縛られてしまう霊のことだ。彼らは自縛霊と違い、後悔や恨みを晴らせば成仏することなんか出来ない」

念縛霊とはつまり他人から縛れた霊だという。彼らは他人が自分の事を忘れるまで恨みや後悔が晴れても成仏出来ず、噂がある限りずっと彷徨っしかない。

「ふざけるなよ・・・なんだよ、それ！」

「人間が人間を縛り付ける。人間が噂するために、自分達の恐怖を野放しにしている。そして首を締める。

人間とは救いがたい生き物だねえ、全く」

まるで私の苦渋の顔を楽しむように奴はニヤニヤと笑っていた。

「これが・・・これが事件の終わりだったのか？こんな救いのない、アンハッピーエンドが・・・」

「現実なんてそんな物さ。

ハハ、アハハハハハハハ」

絶鬼の笑い声には私は何もすることが出来ず、ただ悔し涙を流すことしか出来なかった。

私はそのことをずっと黙っているに違いない。お婆ちゃんに未練なんか残してもらいたくないから、私はこの罪悪感を一生涯背負わなければ・・・

「なんだってんだよ、重すぎるよ・・・こんなの！！！」

「ハハハハハ、アハハハハハハハハハハ」

実を言うところの話には続きがある。これは、全てが終わった後の話だ。

あの後、私の泣いている姿に愉悦を覚えて笑い続ける絶鬼をアキラが殴り飛ばすことで全ての落ちがついた。まあ、付け加えるなら絶鬼が血塗れになるまでアキラがボコにしたくらいか。

「あゝ、流石に着物も飽きてきたし次はどうするかな」

『なら軍服なんかどう？』

「軍服だったてさ・・・」

『海軍のなんかどう?』

「海軍、ねえ」

実は、この話は意外に不幸で終わるわけではなかった。ちゃんと後日談があるんだ。

「秋葉さんはどうアレンジする?」

『ここに花の刺繍と、ここにはハートを入れたら可愛いと思わない?』

「あ、それ貰い♪」

実は約束を果たした秋葉婆ちゃんはその後自由に徘徊出来るようになった。私自身もあの後から靈感が覚醒したためにこうして霊体になる必要もなくなった。

『ちうちちゃん、その洗顔剤はやめな』

「え、でもさ」

『界面活性剤が入ってるからやめときなさい。界面活性剤は肌を壊

すただだよ。

シャンプーとリンスもやめて、全部石鹸にした方がいいかもね♪」

「は？ちよつ、待ってくれ！」

お節介焼きで、良い理解者が私に出来た。ただ・・・少し口煩いけどね。

「お姉ちゃんを信じなさい♪」

ちうちゃんくらい之年なら肌は1ヶ月、髪は・・・染める予定がないならトリートメントも合わせて一年で良くなるよ♪」

「い、一年?!」

「あ、その眼は信じてないって眼だね？

大丈夫。私だって石鹸で洗ってたんだし。ほら。自慢じゃないけど中々の髪でしょ♪」

幽霊は死んだ頃の姿だと言うが、それなら確かに秋葉婆ちゃんの髪は正直羨ましいと思う。でも一年か・・・

「ちうちゃんは素材がいいから、大丈夫よ。お姉ちゃんを信じなさい♪」

全く、まさかこの歳になって姉が出来るとは・・・悪くないじゃね

ーか。

『ちうちゃん、好き嫌いはダメよ』

しかし、幽霊が料理って・・・見えない奴には真性の生ホラーじゃねえか。

「ハイハイ・・・って、紫蘇は入れないで！」

流石に、ちとお節介過ぎるけどな。

さらに、実を言うところの話には裏話がある。

それはとある生徒達が廃校舎に侵入し、噂を試したのだ。

彼らは面白おかしく笑い、騒ぎ、荒らしていく。そして着いた先で彼らは乱暴に扉を蹴飛ばしていく。それはどう見てもノックとは程遠いものであった。

「はーなーこさーん、遊びましょーってか」

「なんだよそれ」

「きやはは受けるわアンタ」

「だろだろ？」

乱暴に蹴飛ばされていく扉は蝶番が歪みギシギシと音を立てている。それさえ楽しいのか彼らはカメラを回しながら次に移る。

そして二番目、そして三番目の個室を蹴飛ばした時だ・・・

『はあい・・・』

噂でしかない幽霊。

噂でしかない事件。

噂でしかない存在。

それらは人が作り出したものである。

そして、作られた者達は彼等の望み通りにする。

今回は、ただ止めてくれる人がいなかったただけ・・・

『何して遊ぶ？私は・・・鬼ごっこが良いなあ。私が鬼をやるよ・・・』

今回はトイレの花子さんでした。

有名な日本の幽霊で、昔はポンキでもアニメになってましたね。

そんなトイレの花子さんですが、今回は調べてみたら元になった少女の名字が同じだったためアレンジして作らせてもらいました。どうでしたか？

では、今回もまた絶鬼先生の補修です！

まずは作中で自縛霊と念縛霊と出てたけど、今回はそんな彼らの供養の仕方だ・・・正直、鬼の手でできれば一番手っ取り早いというのに。

もちろん隠れてそんな事をしていた時もあったさ。

だがアキラに見つかった時から止められるようになってね。今、そんなことしてみなよ・・・アキラに今度こそ焦熱地獄まで叩き落とされてしまっよ。

さて、話を戻そうか。

よく世間で、魔の交差点とか魔の踏み切りとか云われるような、同じ場所で同じような事故が続いて起こる事があるだろう。一体これはなぜか？

実は、【事故】そのものが偶然起きる現象じゃあないのさ。ほとんどの事故の原因には、ハッキリとした霊的要因があるのは珍しいことじゃない。

じゃあ、なぜ特定の場所で同じような事故が重ねて起きるのかというと、このような自動車や電車等によって起こる交通事故とか、山での遭難事故、転落死や投身自殺などで死んだら【地縛霊】になるからさ。

【地縛霊】というのは、その地点からせいぜい50～60メートル四方の範囲しか、自由に行動が出来ない【霊の状態】なんだ。

これだけでも相坂さよの規格外さがわかるだろ？アイツは正直言って自縛霊なのかさえ疑ってしまうよ。

さて自縛霊だけど、非常に孤独でさびしい状態が続くからたまらず仲間を呼び込もうとするんだ。死ぬの怖い、殺すのはダメと言いなから死んだら仲間が欲しいから同じ境遇を作る・・・愚かしい業だよ。

霊的な曇りの多い人間はおなじ場所に行った時、その霊の影響を受けてしまい呼び込まれてしまう。同じ場所で次々と事故を起こす事になり、ついにはそこが事故多発地点となってしまうのはこういうわけさ。

さて、ここからが重要な問題だ。

【地縛霊】の場合、仏壇に位牌を準備して祀っても、その霊は、自由に移動する事が出来ないから、簡単には自分の位牌にかかれな
い。そこで、【地縛霊】の特別な供養が必要になってくるだ。

先ず、亡くなられたその場所一帯を靈的に浄める（施光）ことが大切だ。そうだね清めるといっても意味がわからないだろうから・・・まあ灰塩でも撒くか、御神酒でも撒きな。後は徳の高い坊主に頼むかだね。

そして、無事に位牌に移動させるには、しばらくの期間その場所に供養塔を建てた後に毎日お食事をお供えしてお許し願う事が最良だね。

さて、今日はこの辺にしておこうか。それじゃあ、またいつの日にでも。

今回は話を分けています。てか長いから分けました。

自分でもなんでここまで長くなったのかわかりません。

そしてなんでこんなに長いのを二日で仕上げたのかさっぱりです。

最近鬼嫁と拮抗して・・・あと20近く証集めと思うと・・・

後はネギまと仮面ライダークウガのクロスを考えてて、それについて意見が欲しいです。

正直暇つぶしに他の書いてないと自分で読んでも面白い作品書けないので・・・

なんでそっちのプロットは全部終わってるのに、こっちは学際までいってないのか信じられないわ。

花子さんの事件が解決して数週間、麻帆良に滞在を初めて一ヶ月半。絶鬼はいつになれども緩まない自身の監視体制に辟易としながらアキラ達の後ろをついていく。

本来ならホテルにずっと引き籠っているべきなのだ。外に出れば外からの侵入者としか見ない短絡的な魔法生徒達に鬱陶しい目で睨まれる様に見られ、さらに友好的な者達・・・少なくとも絶鬼はそんなことを考えていないが、友好的な者達も役目と言って彼の行動を監視しなければならない。

四六時中監視され、監視しなければならないというのは本人と良心的な者には多少のストレスとなって彼らを苛む。もちろん、その中には彼を敵視する魔法関係者は入っていない。彼らなら進んで監視の役を願い出るだろうが、そんなことは近衛門や高畑、刀子が許さないので無用なトラブルを避けるというのもある。

ちなみに、今回は刀子と神多羅木である。彼らは数少ない絶鬼に対し友好的な者ではあるのだが、今回はどこか敵意を孕んだ視線で絶鬼を睨んでいた。

「何をそこまで睨む必要があるんだ？」

「今日は・・・今日は大切な日だったんです・・・」

「生理か？」

「刎ネマスヨ」

何を刎ねるのかを神多羅木は聞かない事にした。

その代わりに首をさする事で首がまだ泣き別れしていない事を確認する。

「ふう・・・で、どんな予定なんだ？」

気による鋭利な切れ味を持たせた手刀を首に充てられた神多羅木は溜息と共に煙草を点けながら殺気立つ刀子を宥める。そんな彼の様子を見て刀子も頼んでいたコーヒーを一気に煽ると音を立てながら椅子に座る。

「デートですよ、デート」

「おや、それはいい報せじゃないか。それでどのくらいになるんだ？」

「・・・まだ、その一カ月・・・です」

「ほう、だったら楽しい盛りに入ってくるころじゃないか」

「そ、そうなんですよ！彼ったら照れ屋で、たまに男らしい仕種をしようとする姿が可愛いというか、嬉しいというか・・・」

それにこの前なんか不慣れな手料理を作ってくれたんです、少ししよっぱかったんですけど、そこがまた良いというか何というかへへへ」

（首の皮一枚の筈が、この展開は一体・・・）

自分の彼氏自慢と惚気話を始める刀子をサングラスに隠れた目は冷たく見つめていた。トリップする彼女は確かに幸せそうで、見ているだけで満腹感を齎してくれそうだが・・・このままでは胃が破裂してしまう。

なにより、人間は砂糖だけでは生きていけない。糖尿病になれば死ぬことにもつながる。

「何をしているんだ、彼らは？」

「絶鬼君？」

「なんでもないよ、ほら彼女達が待っているんだろ。早く行こう」

今日も今日とて絶鬼の憂鬱な一日と、事件が始まる。

さて、冒頭よりも数時間も前の事だ。絶鬼は今日一日を部屋の隅に積んでいたゲームを崩して日を費やそうと考えていた。最新作から名作、クソゲー、レトロ、パッケージ買いと様々な理由で積まれたゲームを見ながら絶鬼は考える。どれから始めようかと。

手始めに一番下にあったゲームを手についた絶鬼はそのまま袋を乱暴に破くとCDをハード機の中に入れる。どこかチープなブランドロゴの後に古臭いBGMの流れたゲーム画面を見ながら彼は気合を入れるようにコントローラーを握る。

だが、ゲームのスタートメニューを開こうとしたタイミングで電話

が鳴る。メールではなく電話のコール音に彼は嫌々と出る。彼の携帯の番号を知るのは親しい者が、依頼くらいだ。居留守が許されないのだ。

朝早くから電話を賭けてきたのはアキラだった。電話口での彼女の第一声は、もしもしても、おはようでもない。

『絶鬼君？今日“も”暇だね？』

電話の第一声はいつにもまして失礼な一言で始まった。彼女は僕に喧嘩を売る為に電話をしているのだろうか和本気で考えたね。

絶鬼は電話を耳と肩で挟みながらゲームを続ける。始まるモノログを読みながら何か上手い言い訳はないものかと考え、近衛門に呼ばれているという事を伝えようとする。

『残念だけど今日はもう予定が——』

『なら夕菜がカラオケに行こうっていうから一緒に行こうよ』

無視された。

『話は最後まで聞くものだよ』

『どうせ一日ゲームでしょ』

しかも見透かされている。

はて？この部屋にはいつから隠しカメラが設置された？

いったい、この僕の何処が単純なのだろうか？

誰でもいいから教えて欲しい。

そんな考えなど意味がなく、それでいて僕の義妹が気にかけるとは到底及ばない想いを抱きながら僕は次の一言に頷くしか出来なかった。

逆らえるような力関係ではない。

たとえそれが人間と妖怪とはいえ、絶鬼とアキラの上下関係は既に完成し、完結している。

逆らおうものならボコボコにされるといっなのはこの十年間でしっかりと身に染み込まされている。

『もちろん行くよね？』

『・・・ハイ』

情けないけど、妹には勝てないんだ。

眠鬼にもそうだけど、どうも僕達は妹には弱い。

今回はベクトルこそ違うが、勝てないのは事実だ。

可愛いから勝てないか、怖いから逆らえないという絶対的な違いだけだね。

絶鬼は何故か霞みだすテレビを見ながら苛立たしげに埃をふき取る。

だが霞みは一向に取れる気配がなく、逆に時間が経つにつれて全体がぼやけてきた。握っていたコントローラも強く握っていたせいか濡れている。

「情けない・・・僕は鬼失格だ」

『自己否定なんかしてどうしたの？相談くらいならのれるよ？』

落ち込む僕に優しく語りかける諸悪の根源の表情はこの上ない慈愛に満ちているに違いない。

信じられるかい？

脅迫によっていたいけない鬼を外に引き摺り出した人間が慈愛に満ちた表情をしているんだよ。

鬼子母神だってもう少しらしい表情をするに違いないのに。

それでも聞いてくれると言っなら話すのも吝かじゃない・・・話すだけならタダなんだから。

「妹が最近怖——」

「お話」

どうやら僕の義妹は人間の皮を被った新手の鬼らしい。

「それが怖いと言っているんだ！なんで君はそうやって力で訴えかけるんだい？！」

「だって、兄妹だもん」

「つくそ、それを言われてしまつと何も言えない自分が情けない！」

自分が鬼で、鬼は弱者を甚振る権利がある。それはつまり絶対的強者にして支配者なんだ。つまり弱者の命は強者に握られている。そして今回僕の命はアキラに握られている。

しかも、アキラは僕の兄妹だから問題ないという大義名分さえ抱えているとは・・・勝ち目なんかないじゃないか？！

「この兄にして、妹ありだね」

「君は最近おかしい。昔の君はあんなにあどけなく純粋だったのに・・・」

昔は可愛かったと絶鬼は感傷にふける。鬼の頃はそう言った物と無縁であったが、アキラと過ごしてからは昔を懐かしむようになっていた。むしろ昔に戻りたいと望んでいた。

ほんの十年くらい前のアキラなら少し絶鬼が脅かすだけで泣きだし、どこかに行った。

だが今では絶鬼が泣きだし、従っているのだ。立場もここまで逆転すればいつそ清々しい。

「甘えて欲しいの？」

「気持ち悪い」

自分に甘えてくるアキラを考えた絶鬼はすぐにその想像を切り捨てる。どうも彼の中では彼女が純粋に甘えてくるという現実はないものらしい。

何か裏がありそうで怖い。

アキラによってこじつけられた待ち合わせに対し絶鬼は時間ぴったりに来た。

待ち合わせ場所には既にアキラと、彼女の友人である佐々木まき絵、明石夕菜、和泉亜子がいた。四人とも休日ということもあり私服で、たまに横を通り過ぎる男子達が振り返ったりしていた。

三人のうち一人が絶鬼に気づく。

そして、待ち合わせでの第一声だが・・・

「少し頭冷ヤソウカ」

ナニ、コノ展開？

「何故だ?!どこにお話しフラグがあつた?!」

物陰に連れて行かれそうになる僕を見るアキラの友人・・・えっと、亜子に夕菜にまき絵だったかに手を差し伸べる。

しかし彼女達は助けるどころか笑いながら手を振るばかり。

「さすがにあの内容なら怒って当然だよ」

「いやゝ、まさか絶鬼さんがここまで乙女心のわからない人だったなんて初めて知ったよ」

「ダメですよ絶鬼さん。アキラだって女の子なんですから、繊細なんだよ?」

・・・こいつら人間じゃない!どんな血の色してやがるんだ?!

それと、悪いんだが本当に意味がわかりません。

「てか、二人とも助けにいかんの?!」

「「じめん。無理」」

「誰か、誰か助け——」

結局僕は三分の一殺しで済ませてもらった。最近思うが、僕の妖気が一向に回復せずに大量消費に傾いているのはアキラの折檻のせいじゃなからうか。

いつになったら僕はあの時の僕に戻るんだ？！

もう嫌だ！やっぱ人間怖い！

道中で色々と話しかけられていた絶鬼だが意識はゲームに夢中であつた。相槌こそ打っているが、自分から話しかけることは全くない。彼自身不本意な合半ということで触れ腐れいるのもあるのだから。

なんで人間なんかと・・・

それ以外に彼は人間が嫌いである。もちろんアキラも好きというわけではないが、長い付き合いと覇鬼に似て彼も兄という存在であり妹を蔑にすることは基本的ないためでもある。これが赤の他人なら問答無用で脅すなりなんなりしていただろう。

「絶鬼君。外に来てまでゲームはよくないよ」

「君は今携帯ゲームを販売する企業と、ラブプラスをしている者を敵にした」

「してるの？」

「今はスパロボ」

「いつかはするんだ」

「基本的にああいうのはしないな」

「じゃあノベルはするの？」

「あんなの小説みたいなものだ。ギャルゲーだとか、オタクっぽいという偏見で差別するのはやらず嫌いのすることだよ」

「・・・」

「パティシエなにゃんこは泣けた」

ゲームを続ける絶鬼の横を歩きながらアキラは彼のゲームの依存度にどうしようかと悩んだ。昔はそこまで酷くはなかったのだが、今は酷い。放っておけば四六時中ゲームをしている。

お母さんに相談するべきかな？

「そういえば、絶鬼さんがこの前の花子さんの事件を解決したって本当ですか？」

「誰から聞いたのか知らないが、人違いだよ」

「でもでも、女子寮の幽霊事件は絶鬼さんが解決したじゃないですか」

「あれは成り行きだ。そう、とーってもキツイ成り行きでね」

「絶鬼君も大変だね」

横目で睨まれていたアキラはしたり顔で心配をしていた。それを見ながら女は怖いと考えながら絶鬼はゲームの電源を切った。

土曜ということもあり通りには大勢の学生や大人達が歩いている。絶鬼も見慣れてきたとはいえ、そこまで人の密集した場所に住んだ事がないので人が横を頻繁に通り過ぎるのが彼には鬱陶しく感じていた。

アキラ達に案内される形で向かっているカラオケ店は線路を挟ん

でいるため、カラオケ店に着くには線路を跨がなければいけない。
また跨ぐには駅を通るか、陸橋を渡るしかない。距離も後数分とい
う距離である。

だが目的のカラオケ店を間近にして絶鬼は全てから意識を離れた。

優奈達は後は陸橋を渡るだけだという中で絶鬼は彼女達にやんわり
と断りを入れると少し離れた駅に行くことにする。アキラが彼を呼
びとめようと声をかけようとするが、それより先に彼女の手が掴ま
れた。

アキラの手を引いて優奈達と別れた絶鬼は戸惑う彼女を余所にズン
ズンと歩いていく。慌てるアキラが後ろを向けばニヤニヤとする少
女達がいた。そのために、彼女達は無表情の絶鬼の顔を見る事は叶
わなかった。

アキラが絶鬼に対しみんなと別れた理由を聞くのは彼女達が陸橋へ向かう道に入って暫く経ってからだった。彼女達が見えなくなつてからアキラは自分の意識が途切れていた事に気づき、その間無防備であつた事に羞恥心を覚える。

「いきなりどうしたの？」

繋がれていた手を振りほどき、前を歩いていた彼の前に割り込む。

（あ・・・）

その時になって彼女は何故か寂しいと思つてしまう。そして遅れてくる羞恥心を覚え、を隠すように反対の手で握る。

「あつちは何かと面倒だからね」

「面倒？」

「そう、面倒だ」

彼が面倒というのは珍しくもない。

しかし、いつもの面倒とは違ふのだろう。

つまり彼はあちらに行く事で何かしらの面倒事に遭遇すると言いたいのもかもしれない。

これからの行動に対する億劫ではなく、彼は第三の原因で伴われる問題が億劫なのだ。そうなるとその面倒事とは何か？

監視ではない。そんな事で絶鬼は自分の行動を曲げたりしない。

残ったのは敵対する者。

彼に対し時間を浪費させ、そして彼もそれに対し無視できない相手。つまり妖怪や悪霊である。

「優奈達が危ない！」

「待て待て」

「つつ?!」

走り出したアキラの長いポニーテールを引っ張る。

引っ張る側は問題ないだろうが、引っ張られた側は首が90度も曲げられた上に毛根が痛む。

目じりに涙を浮かべながらズキズキと痛む首をさする。

「なんで止めるの!」

「僕らが行けば元も子もないからだ」

「でもそれじゃあ優奈達が・・・」

「それは問題ないよ」

心配なのかアキラはチラチラと分かれ道を振り返り、その姿に絶鬼は溜息を吐く。

「あそこには人を襲うような存在の気配はなかった。浮遊霊でさえ気配は残すし、それが悪霊ならなおさらだ。

あそこにいるのはただの妖怪だ。それも古くから存在する人間に対して無害のね」

「そうなの？」

「ああ。なにも妖怪全てが人を襲うって存在じゃない。

昔の妖怪の中に人を殺すような者がいたから妖怪＝人間の敵、という考えがあるだけで・・・中にはただの悪戯好きや人間に対して好意的な物も確かにいる。

ようはそこらの野良犬野良猫と大差はない。

けどね、そんな妖怪でも敵意や害意を抱く事がある。縄張り意識の強い妖怪や悪霊だ。

僕みたい力のある妖怪が縄張りに無断で入って来た場合にのみ彼らは自分の身を守る為や力を示す為に襲いかかる事がある。だから僕達は道をそれたんだ」

「つまり絶鬼君がいたらみんなが妖怪の仲間だと勘違いされてたってこと？」

「そうなるね」

「ならなんで私まで？」

「自覚がないようだが、君の持っている御守は僕の妖気の結晶だ。それだけで君と僕は同族だと勘違いされるかもしれない。それ以外にも君は特別靈気が強い。強くなりたいと思う悪霊や妖怪からすれば都合のいい増強剤なんだ」

「でも今までそんなこと・・・」

「今までは昔はそこまで強くなかった。それに他の妖怪達は僕の妖気を察知したから恐れて手を出さなかっただけさ」

そういつて絶鬼はまた歩き出し、アキラもそれについていく。

絶鬼の言うことは納得できたが、それでも優奈達が心配であった。今からでも遅くないから絶鬼と共に様子を見に行くくらい問題ないのではとも思ってしまう。

「言うのが遅れたけど、君だけをあそこに行かせるわけにはいかな
い」

「え？」

「先程君は霊力がなまじ強いと言ったけど、あれはね『君を狙うかも』という他に未練の強い浮遊霊や自縛霊なんかが君に纏わり憑かないようにする為でもあるんだ」

突然の自分への思いやりになさく笑ってしまった。

不謹慎だ、いけないと思っても彼女は確かその瞬間だけこのまま一緒に行ってもいいと考えた。

彼の言い分は尤もだ。

これが最善で、誰もが無事に過ごせる方法ならそれを選ぶべきなのだ。それを無視してまで通すような理由があるのだあろうか？

(・・・少なくとも私にはない)

それでも胸の中にある遣り切れない想いはきつと勝手な罪悪感なのかもしれない。

何も悪いことしてないのに、結果的に優奈達を守った事になるのどこか意固地になりながら彼女達を呼び戻すべきだと考えている。

でなければ私は彼女達の道の先に妖怪がいると知りながらも何もしなかった事になる。

きっと、そのせいだ。ようは・・・つまりは、私は自分の正義で自分を苦しめてるんだ。

（なんて自分勝手・・・）

そして目の前に歩く彼の背中を見ながら私もそれに付いて行く。
それがなぜかとても悔しい。

「「「たすけて」」」

そんな風に思ってた時期が私にもありました。

そう、つい数秒前までは。今は蹴り倒したぜっくんを踏みつけながら走ってくる優奈達を見ていた。

当初の予定であつたカラオケは中止になり、アキラ達は急遽近場にあつた喫茶店にいる。

個人で経営している店なのか、店内には眼鏡をかけた青年が一人本を読みながら珈琲を飲んでいる以外は客人はいない。

それはそれで都合なのだが、その眼鏡の青年が珈琲を苦々しく飲む姿には一同首を捻るしかなかった。

「それで、なにがあつたの？」

未だに怯え続ける亜子達を対面にしながらアキラは落ち着き払つた様子で珈琲を頼む。

全員の注文を取りながらアキラは早く彼女達に何があつたのかを聞きたかったのだが、それでは彼女達の恐怖や焦りを増長させるだけと自分を戒める。

顔が青い。とても怖かつた事がわかる。

「出たのよ！幽霊！」

「女子寮にも出たんだ。何をいまさら」

「昼間に幽霊が出てたまるか！」タ；D；）つゲシ

「ぶげら?!」()、3。()！

「落ち着いて、優奈。とりあえず、最初から話して」

「うん・・・実はね——」

彼女達の話をつなぐところだ。

三人は陸橋へ続く細道を歩いていたのだという。

その道には自分達以外誰もおらず、また向こうから誰か来る様子もない。

最初は亜子は気のせいだと考えていた。

三人の足音にしては音源が多いように感じた。だがそれも話に夢中ですぐに思考の外に行ってしまう。

三人はそれは楽しく話していたのだが、まき絵が気付いたのだ。

「ねえ・・・なんかおかしくない？」

「なにになに？なにがおかしいってのさ？」

「んゝなんかねー音っていうのかな？そうそう、なんか余計なような」

それを聞いた亜子は隅に追いやっていた疑問が浮上するのを感じた。

そして意識した事で今度はしっかりと聞きとってしまう。

ペタ、ペタ、ペタ・・・ペタ・・・

それを聞いた亜子はすぐに背後を振り向いた。

しかし、そこには今来た道以外なにも変わった物はない。人影は

おろか、人の隠れるような場所もないその道が亜子には妙に不気味に感じた。

「な、なあ・・・足音、聞こえへん？」

「足音？そりや聞こえるでしょ。歩いてんだから」

「ちゃう！こつ、なんて言うか・・・」

「驚かそうったって無理無理。私はついこの間モノホン見たんだから」

人生の経験値においては君達より上よん」

まき絵はまだピンとこないのかうんうん唸っており、優奈は信じる気配もない。

やはり自分の気のせいなのだろうかと後ろを向くが、やはりそこには誰もいなかった。

「ほら、早く行こつ」

立ち止っていた二人に笑いかける優奈がまた陸橋へ向かう。

ペタペタペタペタペタペタペタ・・・

「つつ?!」

もう一度振り返る。

それでも彼女が求めているような存在はおらず、やはり何も変わらない昼間の細道がそこにある。

向こうには何台かの自動車が往来しており、その現実味が今ではとても気味悪さを引き立たせる。

「なーにしてんのさ亜子。置いてくよー!」

「ちょ、待つ——」

ペタペタペタペタペタペタペタペタペタペタペタペタ
タペタペタペタペタペタ

「っひ」

聞き間違えなどではない。足音は確かに聞こえてくる。

それも、誰もいない路地からだ。

「亞子？」

[illegible]

まるで裸足で走るかのような音が亜子の横を通り過ぎた。

息をのみ込み、動く事の出来なかった亜子は目尻に涙を浮かべてしまふ。

ハッキリと、それでいてこちらに向かつてくる足音はまき絵も優奈もその耳で確かに聞き取った。

亜子の横を通り過ぎ、まき絵の前を通り過ぎ、優奈の横を通り過ぎた。

そして優奈は顔を強張らせながらこちらを見る二人の表情を見て察する。

足音は通り過ぎていない。足音は自分の後ろで立ち止ったのだと。

「・・・」

首だけ、そしてなんとか動いた眼球だけで背後を見る。しかしそこには何も無い。

猫も子犬もいなければネズミもおらず、ましてや人など影もない。それでもそこに何かいるような気配を優奈は感じていた。

決壊寸前のダムのように流れそうな涙を溜めながら優奈はたしかに見たのだ。

『その場に何も無い事を』

ペタペタ・・・

話を聞き終えたアキラはぞっとするような体験談に苦い顔をする。

（やっぱり私が無理にでも戻っていれば・・・私のせいだ。私が、私が）ジワ・・・

悔しい思いにより涙を溜めこむアキラを絶鬼はクリームソーダを弄りながら見ていた。

（また悪い癖を・・・）ヤレヤレ

「ぜ、ぜつとん・・・その、着いて来てない・・・よね？」

「来てるなら被ってる」

「そっか・・・よかった」

絶鬼の言葉によってやっと緊張の糸が切れたのか向かいに座る三人は重い息を吐きだした。

「もしかしてぜつとん知ってた？」

「うん」

「なんで教えてくれなかったのさ！」

「別に害を感じなかったからね」

「あつたよ！怖かったんだから！」

「言っておくけど、僕達がいれば悪い方に転んだかもしれないんだ。悪戯程度なら笑って済ましなよ」

「悪戯ってなに？」

「聞いてた限りだと、妖怪の仕業ってのは分かるね。しかもわざわざ君達を脅かすような真似をしたんだ・・・その妖怪は悪戯したかったんだろうね」

「うゝこれが悪戯？悪趣味だよ！」

「実害はなかったんだそれでいいじゃないか」

「それじゃ退治とかしないの？」

「なぜ？」

「だって、その・・・不気味やない」

絶鬼は未だに怯えながら身を寄せ合う三人の少女を見て鼻で笑う。

「いいかい、この世は人間の物じゃない。この世には人間の他に植物、虫、動物、鳥、魚・・・それこそ様々な種類の存在がいるんだ。それも数多に。」

その中には妖怪のような存在だって入っている。それを人間の一存で殺す、というのはあまりに身勝手だとは感じないかい？」カララン

「う・・・」

「自然を破壊するのも、生き物を無差別に殺すのも、人間しか行わない。自らの身勝手な感情で人間はそれを行ってきた。」

だが、彼らはあくまで自らを守る為に人間を襲い、自然を破壊する。必要がなければ彼らは無害だ。たとえそれが理解できない物であってもね」ズーズー

「つまりぜつとんは私達が悪いって言いたいの？」

私さ、あんまり難しいことわからないんだけど・・・ごめんね」

「そうだね・・・別に君達だって被害者には違わないさ。だが僕に妖怪の退治を願うって言うのはね、妖怪の命を一つ殺すということだ・・・それも人に危害を加えない無害の妖怪を」

「それは・・・」

「君達の考えを恥じる事はない。人間誰しも見えない、理解できない、対処出来ないのなら恐怖を感じる。そこにおかしなことはない」

「・・・」

「でもね、日本語には後悔先に立たずという言葉があるとうり・・・妖怪を退治した後で悔やんでも何も戻らないってことだけは考えなそれだけだよ」テンチョーオカワリ・カシコマリマシター

それきり三人は何も話さなくなる。

四人の頼んだ珈琲はただただ冷えていくだけであっ

しかし、話はここだけで収まりはしなかった。

それは彼女達が絶鬼に相談した三日後の事である。

麻帆良新聞に大きく見出しを飾る事になった記事を見たとき、アキラは迷わず高畑の元に向かった。

「高畑先生！」バンッ

「大河内君か・・・慌ててるようだが、何か僕に？」

「これを見てください！」バン！

「新聞部の朝刊かい？どれどれ・・・」パサリ・・・

アキラの持ってきた新聞の見出しには大きく、【切り裂かれた鞆！誰もいない陸橋での怪奇！】と書かれている。

それを見た高畑の顔はアキラが見ても険しかった。

「情報が早いね・・・昨日の夜の事だと言うのに」

「これ、もしかして魔法使いの仕業じゃないですよ？」

「すまないがあまり詳しくは話せないんだ」

「・・・先生。実はこの陸橋、三日前に優奈達と行ってるんです」

「なんだって？」

「その時はなにもなかったんですが、実はその際に優奈達は妖怪に会ってます」

「詳しく聞かせてくれないかな。ここではなんだから学園長室に放

課後でも」

高畑はアキラが頷いたのを見ると懷から煙草を取り出して火を付ける。

日頃の彼ならば喫煙所でもない場所で火を付けるような非常識な真似はしないのだが、今回ばかりは彼も思考がマヒしてしまったらしい。

それだけ今回の件は突然であつたのだろう。

「話は聞かせてもらった。早速数人の退魔師に依頼をしておいたが・・・まさか麻帆良郊内に妖怪がおつたとは」

「絶鬼君の話だと無害らしいんですが・・・」

「詳しくは言えんが、被害にあつた生徒は夜間にあの陸橋を使ったようだな。その際に奇妙な足音を聞いたのだそうじゃ」

「優奈達も聞いたと言っていました」

「その生徒も音楽を聴きながらだったから気のせいと考えておつたそうじゃ。」

そして陸橋の中ほどで足音が近付いたため後ろを振り返つた際に彼は躓いたそうじゃ・・・ちょうど誰かに足を蹴られた感じじゃと彼は言っておる。

被害は鞆だけで済んでおるが、中にあつた金属類は全て両断されておつたよ。それも金属バットごとの。もしそこで転んでおらんかったら今頃彼は・・・」

ゾツとするような話にアキラの顔色は悪くなつてしまう。

それを見た高畑は一度咳払いをしてさらに話したそうとする学園長を戒める。

「すまんかった。話はそれだけかの？」

「後は、絶鬼君は力の強い人が近付かない限りは悪戯しかしないとも」

「しかし彼は至って普通の高校生じゃ。魔法はおるか、こちら側に関わっておらんのじゃが・・・」

「悪戯にしては悪意を感じますね」

「・・・アキラ君。もしかしたら彼の力を借りるかもしれぬ。連絡が会った時は頼んでもいいかの？」

「わかりました」

退室したアキラの背を見送った二人は険しい顔で対面する。

「ことは一刻も争う。退魔師と腕の立つ魔法先生で一度その陸橋に向かつてもらえんかの？」

「わかりました。その際に絶鬼君は？」

「彼はダメじゃ・・・ここで呼び出しては互いに悪い感情しか産まん。まずはワシらで内密に解決するのじゃ」

「了解しました」

それからさらに三日後。桜咲刹那が入院することになった。

生徒達には剣道の試合中に竹刀が折れてしまい、それが背中を切ったためだと言っている。しかしアキラにはそれが陸橋の妖怪の仕業だと確信めいた何かを感じさせた。

放課後。刹那の病室に絶鬼を連れて見舞いに来たアキラは彼女の容態の軽さに重い何かを下ろす事が出来た。

「貴方達は・・・」

「大丈夫？」

「え、あ・・・はい。背中への傷は治療してもらいましたので傷痕は残らないらしいです」

「そう・・・よかった。本当に、よかった」ポロポロ

「大河内さん」

自分の安否に泣き出してしまったクラスメイトに困惑しながら、それでも嬉しい感情を笑顔で顕わにした。

「神鳴流にしてはヘマをしたね」

「・・・貴様」

「待ってくれ。それでも一応見舞いに來たんだよ」

その言葉が正しいと証明するように彼は持ってきた果物の盛り合わせを近くのテーブルに置くと奥からパイプ椅子を持ってくる。

「・・・帰ってください」

「それで、相手はどんなのだったんだい？切られたってことは鎌カマイタチ？
かい？それとも魑魅魍魎？」

「・・・貴方に見舞われる理由など——」

「ふむ。妖気があるということは・・・鎌？の線が濃厚かな？」

「あの、聞いてます？」

「傷は深いのか？」

「・・・綺麗に抉られてました」

話を聞こうともしない絶鬼に刹那は諦めに似た虚脱感を感じた。

対する絶鬼はキョトンとした顔で刹那を見ていた。アキラは顔色

を悪くしている。

「挟られた？」

「はい。それも綺麗に、です」

「切られたんじゃないのかい？」

「私とて剣を使う身。切られたら分かります」

「傷は見せてもらえる？」ドレドレ・・・

「そんなの昨日の時点で消えてます」ダレカヨビマスヨ

「・・・」

「貴方はアレに心当たりでもあるんですか？」

「相手の姿形は見たかい？」

「私はハッキリとは・・・でも、二つの足でしょうか？それが私の背中を挟った後は見えませんでした」

「他には？」

「紺の布に、黒くて長い毛・・・後は電灯の逆光でよくは」

「・・・少なくとも動物チックではなかったみたいだね」

「動物、というよりはアレは——」 人の上半身 』のような感じがしました」

「——ということだ、宜しく頼むな三下」

「三下とは誰の事でしょうか？愛衣を馬鹿にするなら私が許しません事よ！」ヒドイ、オネエサマ・・・

「お前だお前。お前も含めて三下っていつてんだ三下」プヒー

「きーーーーー！なんなんですか貴方！なんだって言うんですか貴方！なんだというんですか貴方は！」

「黙れ三下。近所迷惑だ」

「むっき~~~~~」

「お、落ち着いて御姉様！」

「おい、アレを連れて行っているのか？」

自分の背後で後ろで騒ぎ始めた高音を指差す絶鬼の眼はとても冷めている。

そんな目で見られている刀子は暗に『麻帆良は人材不足か何かですか？』と言われているようで言葉に困ってしまう。

「本人達がどうしても・・・というか勝手着いて来たんです」

「管理統制どうなってんだよ？」

「申し訳ありません」

「あんな中途半端二人なんて連れてったら間違いなく瞬殺だよ」ベツニイケド

「貴方！」ズビシ！

「ん？」

「私達を侮ってもらっては困ります！我々は日々弛まぬ錬摩を（ry」サスガデスオネエサマ！

「あのトリップはいいとして・・・神鳴流が一人に魔法使い二人、使えない荷物が二つか」ウゼエ

もう一度後方を見ると背後には黒と白をベースにした制服を着込んだ高音と麻帆良中学の制服を着た愛衣が騒いでいる。

騒ぐ高音を宥める度に愛衣の髪を縛る赤いリボンがフワリフワリと揺れている。

「貴方としてはどうでしょうか？」

「面倒この上ない。逆に神鳴流としてはどうなんだい？」

「今回の件ですが、私は悪霊とみております」

「・・・へえ」

「妖気を感じたため妖怪とも思いましたが、あれは間違いなく人でした」

「・・・悪霊が神鳴流の気を突破できるのかい？」

「いやむしろそれくらいの悪霊ならこの結界が反応するはずだ。ただの悪霊じゃない？」

「怨念・・・邪念・・・いえ、もっと複雑な念を雁字搦めにしたような感じがしました。少なくともアレは召喚された魑魅魍魎とは次元が違います」

（面倒になってきた）

絶鬼は視線の先にある陸橋を見ながら何回目になるかもわからない溜息を吐いた。

「とりあえず行こう」スタスタ

「そうですね」スタスタスタ

「・・・」スタスタスタ

「まったく！吠え面かせてやりますわ！」ズカズカズカズカ

「あ、まってください」トコトコ

刀子を先頭に高音と愛衣、絶鬼、最後尾に神多羅木という列で陸橋を目指す。

本当ならば各個自らの身のみ気遣いたいのだが、力量的に考えるとこれが一番ベストだと神多羅木が言い出したのである。

刀子は神鳴流と言うことで妖気に敏感の上、相手は人を殺すような妖怪。緊張の糸が張り詰めた彼女ならば奇襲を捌き切ることも可能である。

次に後方に神多羅木が配置したのは、後方から敵が来た場合に備えて自ら止めなくてはいけないためである。

彼は魔法使いの典型で近接があまり得意ではない。特に今回のよ

うな奇襲をかけるタイプは避けるか受けるかしなければいけない。そうなると困るのは後ろの人間だ。そのため後方、援護が可能で通り抜けても刀子達がすぐに援護に駆けつける位置を選んだ。

そして絶鬼だが、彼の腕四人とも知っている。彼の使う魔法道具は拘束・防御が出来るため高音と愛衣の近くに配置した。

最後に高音と愛衣だが、彼女達は守れる位置に配置されている。それを彼女達は全く理解していないのが十畳な点である。

「何も変わった物はありませんわね」

「そうですね・・・至って普通ですけど」

「「「・・・」」」

「ふん。これだけのメンバーに恐れをなしたのでしょうか!」

「そつでしようか?」

（妖気は感じないが・・・空気が不穏だ）

絶鬼は持っている霊水晶とは別に経文を逆の手に持つ。

奇襲において迎撃するのが一番早くて済むのだが、下手に怪我をするだけは避けたい。怪我の度合いによってはまた妖力を消費することになる、

「少し様子を――」

シャカシャカシャカシャカ――

「え？」

「どうしました？」

シャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカ――

「何か聞こえませんか？」

遠くに車のエンジン音と電車の走行音が響く中で愛衣はキョロキョロと周りを見る。

それに吊られて高音も耳を澄ますが、特に何も聞こえてはこなかった。

「特に何も聞こえせんよ」

「気のせいかな？」

気のせいだと二人は判断したが、残る三人は警戒を強めた。

前方、背後、両脇からいつでも襲いかかれてもいいように自分の武器に手を添える。

シャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカ
カシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカ

「やっぱり何か聞こえます御姉様！」

「何かしら、この音？」

遠くから、とても遠くから聞こえてくる奇音に愛衣は怯え、高音はじつとりと汗をかくのを感じる。

シャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカ
カシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャ
カシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャ
カシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャ
カシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャ
カシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカ

「っ 葛葉！」

一番最初に神多羅木が気付いた。

音源がどこから来るのか、そしてどのようなルートを辿るのかを。

「っっっ?!」ガギンッ

刀子も神多羅木の言葉を理解して野太刀を抜く。

「「え?」「」

よそ見をしていた二人は遅れてそちらを『振り向く』と目の前に黒い何かが迫っているのが視認出来た。

スローモーションのような、テレビ越しに見ているような他人事のようにゆっくり迫る黒い何かを見ているしかできなかった。

「白衣観音よ!」シャッ

目前に迫る攻撃に何もしようとしない二人を見た絶鬼は一瞬で経文による結界を張る。

金属同士がぶつかり合ったような音を立てながら襲いかかった何かはそのまま神多羅木の横を通り過ぎて反対側へ落ちた。

「これが事件の犯人かい？」

「・・・」シャカシャカ

絶鬼が面白いと言わんばかりに口を歪めながら襲いかかってきた犯人を見やる。

そこにはあるべきはずの下半身がない女性がいた。

両腕で腕立てをするように立ち上がり、見上げるように絶鬼達を見ている。

どこかの制服は薄汚れ、長い髪はボロボロで乱れている。顔は隠れて見えないが爛れているというのは分かった。

「人間はどこまでも愚かだね」

妖怪にも堕ちる事の出来なかった出来損ない。それが今回の事件の正体であった。

「こ、これは・・・」

「事件の犯人。そして悪霊にして妖怪にもなり下がれない出来損ない」

「下半身がない・・・」

両腕で立ち上がった悪霊を見ながら絶鬼はニヤニヤと口角を上げていく。

人間を怖いと考えていたが、それと同時に面白いとも考えている。

自分達を脅かす存在を消そうとしながら自分達もその脅かす存在になる矛盾した存在。

「面白い。面白いな人間は」

「来ます!」

「魔法の射手・連弾・風の3矢!」

「影よ!」

高音と神多羅木が動き出そうとする悪霊に対し牽制を行うが、悪霊はそれら全てを受け止めて尚速度を上げ続ける。

真直ぐ、一団に向かう悪霊の形相に愛衣は腰を抜かしてしまふ。

「斬岩剣！」ッカ

間合いに入った悪霊に対しすかさず剣を振りおろす。

無理によけた悪霊はよろけながらも真直ぐに高音と愛衣に向かって走る。

シャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカ
カシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカ

「僕を忘れてもらっては困る」

ゴォォォン！

絶鬼の張った結界に悪霊は頭から衝突した。

鈍い音を立てたというのに悪霊は顔を上げると結界の奥にいる高音と愛衣を見る。

「っひ」

悲鳴とともに後ろに下がった二人に対し悪霊は前に出た。結界はそれだけできしみ、絶鬼の顔も比例して険しくなる。

結界が破られるのにそこまで時間は必要がなかった。

一步、ただそれだけ無理矢理前に出ただけで結界は破られてしまった。

それからの悪霊は自分を阻んだ絶鬼を見ることなくまた走り出そうとする。

「舐めるなア！」

絶鬼が一步地面を強く踏み込む。妖力を陸橋に流したのである。

数秒で高音達に到着する悪霊よりも、絶鬼の妖力の方が早かった。

舗装されたコンクリートが盛り上がって丸い柱のような何かが悪霊を遠くに吹き飛ばす。

「この僕を無視とは、舐められたものだ」

「え、これって絶鬼さんの・・・？」

「勘違いしないでくれ。別に君達を助けたわけじゃない」

陸橋から生えた青く光る柱はスッと消える。

絶鬼は上空に吹き飛んでいる悪霊を見ながらニイッと笑った。

「この僕を止めなかった浅墓な考えを正してあげるよ」

パチン、と指を鳴らした絶鬼に従うように陸橋から太さが異なる突起がいくつも飛び出した。

それらは未だに空中にいる悪霊へ殺到する。

十、二十を超える妖力の棘は空中で絶鬼達を見下ろす悪霊へ殺到する。砂糖に群がる蟻よりも貪欲に、ただ悪霊に突き刺さるうと。

「・・・」ガシ

「へえ」

悪霊は貫こうとする石の槍を掴むとそれを足場にこちらへ跳ねてくる。

時折霞める攻撃にブレることなく真直ぐにこちらに向かってくる悪霊に対し絶鬼はまた指を鳴らす。

すると悪霊が掴んでいた石が突然ハリネズミのように小さな棘を生やして悪霊を攻撃する。

グズグズとささる音が聞こえる。

数メートルの高さから落ちた悪霊はダメージを感じさせない動きで立ち上がるとまたこちらに向かってくる。

「斬鉄閃！」

「連弾・光の矢」

それを許さないのは教師陣だ。

気によって悪霊切りつける攻撃と、風の矢よりも早い光の矢が悪霊の腕を狙う。

しかし、それを受けてなお悪霊は構わずにシャカシャカと足音を立てながら走る。

「馬鹿な?!」

「なんで?!」

自分達の攻撃が有効でない事に驚きながらも近づく悪霊に攻撃を続ける。それでも、その速度が落ちる事はなかった。

「これはどうだい！」

絶鬼は自らの妖力で刀を作るとそれを悪霊に振り下ろした。

悪霊とは、無色の霊力の塊である。

霊力が霊の感情に左右された結果、負の力に傾いて悪霊になる。

だが妖力は最初から負の力である。正の力である気や魔力と違い、妖力は最初から負の力ではない。

故に妖力は悪霊、霊力の塊に対して決定的なダメージを与える事が出来る。

「なに?!」

だというのに、悪霊は振り下ろされた妖力刀に切りつけられながらもその動きに鈍りを見せなかった。

深く、深く切りつけた手応えを感じた絶鬼は悪霊に押しのけられてしまう。

「っひ」

悪霊の顔を見た愛衣は既に気絶する寸前である。隣にいる高音はなんとか気丈に振舞っているが、腰は抜けたままだ。

逃げろと誰かが言っているのに逃げる事も出来ない二人は何も出来ないまま悪霊の足音を聞きながら待っている死を意識し始める。

ペタペタペタペタペタペタペタペタペタペタ！

その足音が聞こえたのは一体何人いただろうか？

二人に飛びかかり、その腕を振り上げた悪霊に対し誰もが諦めを感じていたその時だ。

「っきゃ？！」ザン！

愛衣が突然高音もろとも倒れてしまう。

運が良かったのだろう。

悪霊の腕は愛衣の肩から脇腹にかけて引き裂くことなく、彼女の

束ねていた髪を一房刈り取っただけで終わった。

着地した悪霊はもう一度二人を狙いに定めて走り出す。

その際に愛衣の髪がほどけ、リボンが風につて陸橋の奥へ飛んでいく。

逃げようと腕だけで逃げる二人の間近に迫った悪霊は、

二人に何かすることもなくそのまま陸橋の奥に走り去っていった。

一日目 3時現目 『半年近く更新サボってゴメンね あと自分でこk（ry、

ぜつとん先生の講義は今回お休みです。

映画とか観た人なら今回の悪霊がなんなのか検討ついてると思います。

またリクのあった妖怪さんも活躍してるので、次回作も楽しみにしててください。

絶鬼「そういえば、ネギまとクウガのクロスを考えてるらしいね」

作者「（。―。（。A）」

絶鬼「内容は？」

作者「（。A）っ」

アキラ「これ・・・プロットだね」

絶鬼「どれどれ。

・・・ふむ。主人公の五代雄介はでないみたいだね」

アキラ「代わりに作中で出てきた幼稚園児の二人が主人公みたいだけれど・・・」

絶鬼「うん。見てると五代雄介の背中を追う少年二人が話に交わる感じだね。

所々で話に主人公を絡めてるし・・・キャラの過去にも関わらせるんだ」

アキラ「よくあるSSだね」

作者「（；ω；）ウウウ」

絶鬼「それを言ったらおしまいだよ」

アキラ「でも作者ってクウガを完成度高すぎるとか言っていなかった？」

絶鬼「だから五代雄介を省いたんじゃないのかな？」

ほら、クウガって最終回で黒くなっただじゃないか。公式も本当なら五代をそこで死んだっていうことにしたかったらしい」

アキラ「つまり後日談的な？」

絶鬼「後日談からの派生だね。まあ、書くかどうかは読者の様子見だよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4911k/>

地獄生徒ぜっとな

2010年11月21日05時38分発行